

## ■特集／家庭の教育力の復権Ⅱ

---

◇巻頭言 両親が見守ってくれている 杉山 吉茂 2

---

### 特集Ⅰ 家庭の教育力の復権Ⅱ

---

家庭で求められる食の教育	香川 芳子	4
父親の役割と母親の役割を考える	中里 至正	9
しつけの意味と過程 —自己決定理論の観点から—	岩立 京子	14
家庭の教育力低下の2つの大きな原因	杉原誠四郎	19
—子供の教育と民主主義と文明の高度化との関係—		
メディアと子どもの脳の発育不全	森 昭雄	24
家庭崩壊を促し子供を不孝にするジェンダー・フリー	篠原駿一郎	32
家族支援の強化による家族文化の創造	畠中 宗一	37
家庭の教育力の低下に学校はどう対応するか	原 聡介	42
子育てを根源から見直そう	平山 攝	47
—家庭教育の復権のために—		

---

### 特集Ⅱ 家庭の教育力の復権Ⅱ…全家研の運動から

---

家庭における「こころの教育」とポピーの役割	荒川 進	54
家庭教育の大切さは会話と愛情の一言	清永 康子	56
今、子ども達にセルフエスティームを	山下 謙治	59
自分の子育てをふり返って	立石ひとみ	62

---



# 両親が見守ってくれている

杉山 吉茂

早稲田大学教授

先日、テレビで海老名香葉子さんのインタビュー放送を見た。ご承知のように海老名さんは、林家三平の奥さんだった人である。彼女は下町の生まれであるが、昭和20年3月10日の東京大空襲で親兄弟を失った。彼女は疎開していてその難を免れたのであるが、小学生で一人ぼっちになり、食べるものもない、その日寝るところもない、毎日、食べるものと寝るところを探して歩き回る日々を過ごす生活を余儀なくされたという。今と違って、だれもが食べるものも住むところもない世の中である。さぞ辛かっただろうと思う。近所の知っている人を頼りながら歩き回って生きてきたのであるが、冷たい仕打ちを何度されたことか。やがて、三遊亭金馬師匠に拾われて養女になり、後に林家三平の奥さんになるのであるが、まだ駆け出しの病気がちな三平を助けるために、あらゆる内職をしたという。

そういう苦労をした彼女が思っていたことは「両親がずっと見守ってくれている」ということであるという。彼女は、3月10日になると昔の家の辺りを、空襲から60年間ずっと歩かれてきたそうである。そこには、昔の家族との楽しい思い出、父、母の思い出があり、その思い出が彼女を助けたという。食べる物がなくて、もう死んでしまうのかと思ったとき、ここで死んだら、お父さんお母さんが悲

しむだろうな。悪いことをしそうになったとき、こんなことをしたと知ったら、お父さんやお母さんが悲しむだろうな、と考えて生き延びてくれた、悪いことをしないでこれと言われる。お父さん、お母さんは死んでいないけれど、ずっと私を見守ってくれているという気持ちで生きてこれたと。

ヨーロッパの国々、中近東の国々、多くの国々の道徳を支えているのは宗教である。神様が見ているから悪いことをしない。神様が見てるからよい行いをする。神様の思し召しに沿った生き方をしようとしている。日本には、そうした宗教がないのに、道徳的であり得ていて素晴らしいと私は思っているのであるが、日本人は、無意識の内に、親の目、祖先の目を意識して、わが身を律しているのかもしれない。

そう思って振り返ってみると、自分も親を意識していたのかもしれないと思う。父が亡くなって三十数年になるが、自分が何かをなし遂げたとき、そして、今でも、自分の姿を父に見て欲しいとふっと思うからである。親に自分のしていることを知って欲しい。こんなことをしたら親はきっと喜んでくれるだろうと思う。それなりに苦労をし、努力をしてきたのではあるが、そうした思いが無意識にあるのだろう。もっとも、今の自分を見て欲

しい故人もたくさんいる。とすれば、自分は、そういう人に見守られて生きてきたとも言える。そういう人達のお陰で今の自分がある。だから、ご恩に報いるために見て欲しいと思うのである。

「男は仕事、家庭は女」という古い考え方で生きてきた男に、家庭教育について論じる資格などないと思ひ、また、教育の仕事に携わりながら永い間世の中を見てきて、いろいろ主張されていることが正しかったかどうか疑わしいものも多いことを知って、教育を論ずるのをためらうのであるが、子どもが成長したときに「親にみて欲しい」「喜んでくれるようにしよう」「親が喜んでくれないことはしない」と子どもが思えるような親になり、そうした家庭の思い出を作ることは、何にもまして基本的なことかと思う。

戦後、人々は自信を失って、日本のものは駄目、外国のものがいいという風潮を生み、本当はよかった日本を捨ててきたのではないだろうかという思いもある。進歩的な思想家、学者が主張されてきたことの中には、今の駄目な日本を作った基礎になっているのではないかと思われるものもある。今進められている「ゆとりの教育」も見直されつつあるが、それを提案した人達はどう責任をとるのだろうか。そんなことに責任をとる必要はないのであろうか。

育児に関しいえば、先日、ある雑誌で、一時広く読まれた「スポック博士の育児書」は間違いだったという記事を見た。当時、この本は多くの母親、幼児教育者に読まれ、育児のバイブルのように囃されたものである。果

たしてどちらが正しいか私には分からないが、そう言われてみれば、今スポック博士の名は聞かない。

スポック博士の育児が間違いであったという人は、例えば、博士は「抱きぐせをつけるな。子どもの自立を妨げるから」というが「子どもは自立したい。自由になりたいなどと思っていない」という。子どもは親の愛情が欲しいと思っている。たっぷりと愛情が注がれていると感じた子どもは、自然に自立する。「しっかり抱きしめてやることは、子どもが親の愛情を感じて安心する大切なことなのです」と。

この話は、北風と太陽の話の思い出させる。コートを力ずくで脱がそうとする北風、脱がそうとせず、暖かい光を与える太陽。脱がせようとしなくても、条件を整えば自然と脱ぐ。学者達があれこれ言うことの中には、北風のようなことを要求しているものがありはしないだろうか。今行われているさまざまな改革の中にも、それに似たことがある。日本の習慣や考え方の中には、人間をよく知った人々の智慧に支えられているものがあるような気がする。

目先「こうするといい」「ああするといい」というのでなく、人間として大切なことを失わないようにしたい。私は、人にどうこうせよという前に、自分みずからがそのような人間たろうとすることしかできないと思っているのだが。



# 家庭で求められる食の教育

香川 芳子 女子栄養大学 学長・医学博士

## 1. 食の大切さと人における 食の教育・伝承とはなにか

ヒトを含む動物は周囲の動物や植物を食物として取り入れ、呼吸で得た酸素で酸化して得られたエネルギーを使いながら生きている。呼吸には意識的な努力は不要であるが、食物を得るには自ら適切なものを獲得しなければならない。食物が不足してエネルギーが足りなくなると空腹感が起こり、エネルギーのある食物を摂取すると空腹感は解消する。実際、エネルギーの多い食品成分の味や舌ざわり、例えば糖の甘味、脂肪の味、でんぷんの食感などを美味しいと感じて食物を選んできた。

食物はその土地・環境により異なり、子は親の食べ物を見習い、何をどのように食べるかを覚えてきた。また、多くの地域では食物が不足しがちで、そのため社会的な地位により、分配方法や習慣がそのそれぞれの集団で成立してきた。どの民族でもこうして出来上がったそれぞれの食習慣を伝えてきた。その伝え方、内容は国が変わり、同じ国でも地域により、また、社会的なグループごとにそれぞれ違ったものになっている。それらは環境が変わらないうちは大切に伝えられ、それらを守ることが要求されてきた。

わが国の食の伝統は主として家庭で伝えられてきた。何をどのように食べるのか、食事作法なども伝えられ、守られてきた。その内容は意外に多様であり、その土地に生きてきた人々の食習慣であった。それぞれの社会で生きる上に大切なものとして伝えられてきた。しかしながら戦中戦後のように極端に食糧の不足などが続くと生きることが先決になって、それまでの食習慣はかなり失われてきた。戦後60年を経て育ち盛りの頃、食の伝承を受け継ぐ年齢にこうして先祖伝来のものを承継することができないで二代、三代を経て昔ながらの食習慣を失ってしまった人々は特に大都会では少なくない。「衣食足りて礼節を知る」と言われてきたように、ある程度の食が確保されたところにマナーも成立してきたものであることも忘れてはならない。食物自体も大変様変わりしてかつてのような食事をしていない家庭、人も多くなっている。このあたりに家庭で食の教育を母親などに依存して引き継いで行くことの困難さがある。

## 2. 家庭での食教育の崩壊の現状とその背景

昔から日本では「食の教育は家庭で行うもの」との暗黙の了承があった。しかし今では家族の状況や食環境の変化の影響でそれは崩壊してしまったと言わざるをえない。今さら

取り返しのつかないことではあるが、その現状とその理由を考えてみたい。

#### ①家族揃っての食事の減少

従来は食事といえば家族で一緒というのが常識であった。その食卓で食事の内容の学習、食事作法のしつけ、家族間のコミュニケーションが行われてきた。しかし、今では家族揃っての食事は少なくなっている。第一の理由は家族それぞれの生活時間の齟齬がある。遠距離通勤の父親は子供と朝食は共にできない。子供はまた深夜テレビによる夜更かしや、夜食のため、朝寝坊や朝食抜きなどは珍しくなく、食事時間を合わせられない家族が多い。夕食については子供の塾の関係で揃って食べられない、時には母親の勤務の都合で食事時間が変動するなど、夕食を揃って食べられない時間的な問題もある。夕食を同時に食べていてもテレビに注目して、殆ど会話がない場合も珍しくない。

#### ②外食の容易な環境

もともと食物は貴重で、子供が自宅以外で自由に食事することはできなかった。今日、食物は安価で子供の小遣いでも簡単に家庭外で食べられる。自販機の普及、ファーストフード店、コンビニの増加などがこれを助けている。こうした家庭外の食事はともすると子供に窮屈な、父母の小言がうるさい家庭での食卓に縛られないための逃げ道になっている。

#### ③核家族の増加と家庭の調理技術の衰退

以前は主として母親が自宅で食事を整え、家族はそれを待って共に食事をするのが普通であった。三世代家族は普通で、祖父母がいれば食卓に現れる伝統的な日本食が多く出現

し、子供の食に対する経験の幅も自然に広がっていた。しかし、最近では、特に都市部では核家族が大部分であって母親の個人的な偏った嗜好で食生活が左右されることもある。また、過半数の母親は勤務を持っているのが現状で、調理にかける時間が少なく、しかも調理技術も低下していて不得意者が多く、そのため家庭で食事を整えることが負担になっていてなるべく手のかからない食事にする傾向が強い。現在は男女同権とは言っても、勤務があっても実際には家事労働は女性にかかることが多い。核家族の場合には特に著しい。一方、受験勉強時にも女子だけが家事を手伝うことは不公平だとして手伝わせない家庭も増えて、思春期・青年期の女子が調理を身につけることが減った結果、最近の女性は以前に比べて調理技術が低下している。ある調査ではいわゆる専業主婦のほうが食事の支度を嫌がる傾向が見られている。わが国では調理に対する評価が低く、「おさんどん」とか「台所を這いずり回る」といった差別的な表現があるほど台所仕事に対する蔑視があるので、女性は調理を担当することを嫌がる傾向があった。

#### ④手間のかからない食物、簡単に調理できる機器の発達

最近ではこのような料理嫌いの風潮に着目して調理の手間を省くようなビジネスが発達している。調理が容易なインスタント食品や殆どそのまま食べられるテイクアウトや惣菜類などが多くなっている。

また、高齢化、核家族の増加に伴い、世帯構成人数も減少を続け、単身者の世帯が25%に達している。それに合わせて個人別に簡単

に調理できる電子レンジや各種の調理器具が発達し、その結果、殆どの家庭では家族がいても必ずしも母親の調理による食事でなくとも食べることができるようになり、子供でも1人で食べる「孤食」が成立しやすい環境になった。これでは食の教育はできない。戦前、筆者の子供時代には井戸で米を研ぎ、薪で炊飯、家族は炊き上がりを待ちかねて食卓を囲む風景があったが、今では簡単に冷凍や包装した飯を電子レンジで温めればすむ。副食も調理済み食品や、レトルト食品、インスタント食品が豊富で、主婦の調理を待って家族で食卓を囲む必要はない時代になってきた。

#### ⑤住宅事情の変化

住宅事情の好転も孤食の成立を助けている。過去には子供部屋は少なかったが、最近では珍しくない。そこで好みの食物を食べて家族と食事を共にしたがる子供まで出現している。今日、子供たちは家族で食卓を囲むことを嫌うことが珍しくない。食事を共にすると親から成績や行儀についてうるさく言われるのがいやで、なるべく一緒に食事しないように帰宅時間を細工したり、また、朝寝坊して親と顔を合わせないようにするという話も特例ではない。要するに親と食事をするのは楽しくないので避けるということで、これでは食の教育どころではない。

### 3. 家庭での食教育の建て直しのために考えられる方策

もちろん家庭における食の教育は大切な生活の基礎である。しかし前述のような背景に基づく家庭の食環境変化のもとでは食習慣の伝承や食教育を家庭で行うのが難しくなっ

ている。しかし、努力次第でその崩壊を小さくすることもできる。

#### ①家族揃って食事をする努力

例えば朝は必ず家族全員揃って食事をする努力として、夜更かしを許さない、夜食などは食べないようにする。(提供しない、夜の食事は肥ることを教えて自制を促すなど)、これには努力が必要であろうが、早めの朝食は日周リズムを整えるので、心身は快調になり、子供の成績や行動パターンは改善すると報告されている。そのためには前日の夜更かし、夜食などを止め、余裕を持って早起しなければ食欲も湧かない。家族中でこれを守めることは努力が必要であろうが、多くのメリットがあるので試みる価値はあろう。

以前、ある米国留学中の韓国人学者夫妻の話聞いた。二人は遠い別々の大学に通っていたので容易に家族揃って食事ができない状況だったが、子供達のために努力して毎日早朝、家族揃って食事をとり、一日の予定を話し合い、無事を祈ってから(クリスチャンホーム)出かけたという。家族を大切にしている韓国人らしいと感激して聞いたことである。どれほど忙しくとも週に一度は夕食を共にする家族もいる。食事を共にすることで心が和み、互いの心が結び合わされる。子供達が友人と一緒にコンビニで食べたり、ファーストフードなどを摂りたがるのは、この食のもつ共に食べる喜びからであろう。

家庭でも楽しい食事食の話題も弾むようであれば良い食の教育も行われる。食事しながら昔から家庭で伝えられてきた食の内容やマナーなどの食教育は楽しい食事からである。また、子供の喜ぶ雰囲気のある食事な

ければ今のような時代に食の教育はできない。最近の子供の好むメニューは鍋物や焼肉など皆で囲むメニューが、高価なご馳走よりも上位である。コミュニケーションのとれる楽しさが喜ばれるのであろう。

#### ②調理の楽しみを生活の中に(調理技術の向上)

現在はただ食べるためであればすぐに食べられる既製食品は多種類あって便利だし、外食も出掛ける手間さえ厭わなければ簡単である。しかしながら調理ができれば好むものを作れる楽しさと、創造の喜びがある。家族など他の人に喜ばれるのも嬉しい。調理に目覚め、腕を磨く気持ちになれば調理は最高のレクリエーションである。調理に自信のない親でも自ら学ぶことはできる。親子で調理を共同することは喜びであり、食物の好き嫌いも治りやすいし、子供は自然に食の伝統を身につけてゆくものである。

現在、調理は外部化が進み、学校教育では重視されていないが、一旦その面白さに目覚めれば日々の食生活は変化ができ、子供を巻き込んで食のみならず、生涯にわたる家庭や親への強い絆を育てることができる。親が食事作りをしている姿や音は子供にとって懐かしい、心和むものである。頑なな非行少年が炊き立ての飯の香りや、味噌汁の実を刻む包丁の音が心を開いたという話を聞いたことがある。

簡単でも料理ができることは楽しいばかりではなく、健康的な食事を作ることも容易にする。親にしっかりした調理技術がなくとも最近盛んになってきた食育の運動で、子供の通う学校で父母を対象に、あるいは親子での教室が開かれたり、コンクールなども増えて

いる。こうした機会を活用してゆくのも一つの方法であろう。

我々は基礎的な調理技術を普及させるために文部科学省認定の「社会通信教育」や「家庭料理技能検定」を昭和30年代から実施している。自らの家族の和合と健康だけでなく、成績の良い人は文部科学省の生涯学習のリーダーとして認定されて時には自治体から頼まれて地域の子供や住民を相手に栄養や調理について教えたり、地域で楽しい集いをマネージしている人もいる。調理技術を磨くことを勧めたい。

### 4. 学校給食と栄養教諭

#### ①学校給食とは

わが国の学校給食は世界的に見て一流である。まず、栄養学的には文部科学省で示された栄養基準に則って、人的には学校栄養職員、これからは栄養教諭が献立・調理し、すべての児童・生徒を対象に年間ほぼ180食提供されている。現在学校給食を受けている児童は99%、中学生は約70%に及び、教育の一環として位置付けられている。その影響と考えられるのは14歳男児の身長が全国平均が戦後18センチ以上伸長している。5歳から15歳の子供の死亡率が世界で最低なのも学校給食で健康を守られているからであると思われる。

#### ②現代における食の教育の必要性

最近の大きな問題は我々のとる食物そのものが量的に豊富になったばかりでなく、質的にも変化してきたことである。そのため「我々は自らの食物を変えてしまった。正しい食べ方を学習しなければ減びてしまう」心

配がある。最近の高齢化に伴い、寿命が延長するだけでなく、生活習慣病の患者が激増し、医療費もかつては国民所得の3%程度であったのが、平成14年度には8.5%である。これはその半分以上が誤った食生活からまねかれた生活習慣病によることが明らかである。従って食の教育は子供にとっては生涯の健康を支えるために必要な教育であり、教科教育よりも前に教えておかなければならない。

### ③栄養教諭に期待される食育

前記のように家庭では以前のように子供の食生活を完全にコントロールすることは無理であるとすれば次代の人間を健康に育てるために義務教育の中でも食の教育が重視されねばならない。現在はまず児童・生徒にゆとりの教育の時代なので新たな教科目は作れない。また、食の教育は早いほど良いが、小学校では家庭科は5年生からであり、しかも殆どの小学校に家庭科教員の配置はない。そこで学校給食の担い手である栄養士に食の教育の担い手を兼ねられるような素養をつけて、学校給食と同時に食と栄養の教育の担当者とするのがこのたび成立した栄養教諭である。今後はこの栄養教諭を中心に食の教育が進められればと願っている。学校給食を主な教材として児童・生徒に栄養と食生活について教え（学級の時間や総合学習）、食や栄養に関する教科をTT（チーム・ティーチング）で担当する、家庭まで含んで学校全体の食の教育に専門家の立場でコーディネーターとしての活動、地域の食習慣も含めた食育のまとめ役、最近増加傾向の肥満児などの個人指導を校医、養護教諭、担任、保護者と連携して実施するなどの役割が期待される。

問題は栄養教諭の採用は自治体（設置者）が決めることなので、従来の通り学校栄養職員ですます自治体が多くなる心配である。学校栄養職員のままでは学校給食は従来どおりに出せるが教育に携わることは難しく、子供や地域の食の教育には手を出せない立場に留まるので、なるべく栄養教諭が食の教育を担えるように自治体に働きかける必要がある。

我々は生きるための食物を変えてしまった。そして社会的な家族関係、経済事情などの結果、次世代の人々にどのように食について教えてゆくか、かつてのように「食教育は家庭で」と簡単に割り切れない時代になっている。その中でよい食習慣を伝えていくためには、食を大切に作る心をもって丁寧に暮らしてゆき、楽しい食生活の中から良い食習慣を育てるように、学校の栄養教諭などとも連携をとりながら進んでゆかなければならない。





# 父親の役割と 母親の役割を考える

中里 至正 東洋大学社会学部教授

## はじめに

比較的最近のことであるが、日本青少年研究所が行った「高校生の生活と意識に関する調査」の結果をインターネットで拝見した。この調査は2003年に日本、アメリカ、中国、韓国の高校生を対象にしたものである。結果の概要のところでは著者は、『象徴的な結果として、我が国の高校生では「男らしさ」とか、「女らしさ」という言葉が死語になりつつあるのではないかと述べていた。

いわゆる「らしさ」の喪失という社会現象は、単純にそれはそれでよいなど見過ごせない問題を含んでいると思われる。というのは、われわれの日本、アメリカ、トルコの中・高校生を対象とした国際比較調査の結果では、子どもの非行抑制力や価値観の形成に、父親と母親の役割が違っているという傾向が認められたからである。このことは、父親の「男らしさ」や母親の「女らしさ」が、子どもの「しつけ」と何らかの意味で関係しているということを意味している。とすれば、「らしさ」の喪失は、将来的には子どもの社会化と関係するしつけにマイナスの影響をもたらす可能性を含んでいることになる。

本稿では、われわれが2001～2年に科研費によって行った、日本、アメリカ、トルコの

中・高校生を対象とした国際比較データを中心として、父親と母親という性の違いによって、子どもに対する影響力がどのように異なるのかということについて考察することにした。

## 1. 非行抑制力の強弱と親子関係

我が国の親子関係には問題があるということについては、すでにこの研究紀要のNo.31とNo.33で述べた通りである。ここで簡単に、本稿と関連する内容を要約すれば、以下のようになる。

「日本の子どもたちは、他国の子どもたちと比べて、父親に対しても母親に対しても心理的距離が遠いのである。このことは、親子関係が「冷めている」ということを意味している。さらに言うならば、我が国の場合は、親もまた（父親についても母親についても）他国の親たちと比べると、子どもとの心理的距離が問題にならないくらい遠い。このことから、我が国においては、親も子どももお互いに親子関係に問題があるということになる。」

本稿では、親子の間の心理的距離の遠近の問題ではなく、子どもに対する影響力は父親と母親で違っているということの問題にする。具体的には、親と子どもの関係の良さ、

つまり心理的距離の遠近が子どもの非行抑制力の強弱とどのような関係になっているかを、父親と母親とを分けて、それぞれの影響力の実態を検討することになる。なお、今回の検討は、紙面の都合で日本とアメリカのみの比較にとどめることをお断りしておく。

さて、以後の話を進めるに当たって、われわれがどのようにして親子間の心理的距離の遠近を測定したかということと、どのようにして非行抑制力の強弱を測定したかということについて簡単に説明しておきたい。

心理的距離については、以下の7つの質問を子どもたちとその親たちに問うた。これらの質問は、認知的側面の5問と、情緒的側面の2問に分かれている。子どもたちに対する認知的側面の質問の具体的な内容は、①父(母)は何かと私に相談するか、②父(母)とうまくいっているか、③父(母)を尊敬しているか、④父(母)は私に期待しているか、⑤父(母)のようになりたいか、という5問である。また、情緒的側面に関する質問は、①私は父(母)が好きだ、②私は父(母)に愛されていると思う、の2問である。親たちに対する質問も、子どもたちの質問に準じている。本稿では親の子に対する影響力を問題にしているので、影響を受けている子どもの親に対する心理的距離の遠近を中心として考察することになる。

それぞれの質問には「そうである」から「そうではない」まで4段階の選択肢がついている。その答えを個人ごとに総計して平均値を算出し、それを基準にして心理的距離の近いものと遠いものとに2分した。このような2分法は、認知的側面と情緒的側面のそれ

ぞれについて用いられている。

また、非行抑制力については、いわゆる窃盗とか傷害などの刑法に触れる行為ではなく、不良行為、もしくは虞犯と呼ばれている次の6種類の行為について、それらをどの程度悪いことと思っているかを質問した。その具体的な質問の内容は、①タバコをすう、②酒を飲む、③夜遅くまで外で遊ぶ、④学校をサボる、⑤エッチな雑誌やアダルトビデオを見る、⑥異性の友達と2人で泊まる、の6問である。

それぞれの質問には「たいしたことではない」から「非常に悪いことだ」まで4段階でその悪さの度合いを問う選択肢がついている。ここでも心理的距離の測定の時と同様に、得点の総計を平均値で2分して、それらの行為をあまり悪いことは思わない群を「非行に許容的」とし、悪いことと思っている群を「非行に非許容的」とした。したがって、ここで用いている「非行抑制力」という用語は、それが強いということが「非行に対して非許容的」であるということの意味し、それが弱いということが「非行に対して許容的」であるということの意味している。

### 1) 認知的側面の心理的距離との関係

まずはじめに、子どもの親との心理的距離の「認知的側面」の遠近と、子どもの非行抑制力の強弱との関係を父母別に、また国別に示す。表1～表4を参照されたい。

表1と表2は、日本の子どもで、父親と母親との認知的側面の心理的距離が近いものほど、非行に許容的ではない、つまり非行抑制力が強いということを示している。そして

その関係の強さは、表の下に書かれている  $\chi^2$  (カイ二乗) 値と有意確率が示すように、母親よりも父親においてより強いということがわかる。

表1 非行抑制力と父親との認知的な心理的距離の関係 (日本) (数値は%)

	心理的距離 近い	心理的距離 遠い	計
非行に許容的	14.2	85.8	100.0 (804人)
非行に非許容的	24.1	75.9	100.0 (468人)
計	39.8	60.2	100.0 (1,272人)

$\chi^2 = 20.04 \quad P < .000$

表2 非行抑制力と母親との認知的な心理的距離の関係 (日本) (数値は%)

	心理的距離 近い	心理的距離 遠い	計
非行に許容的	27.8	72.2	100.0 (827人)
非行に非許容的	34.3	65.7	100.0 (484人)
計	30.2	69.8	100.0 (1,311人)

$\chi^2 = 6.093 \quad P < .015$

日本の場合、表2は示すように、子どもの非行抑制力の形成に母親も強い影響を与えている。しかしアメリカの場合は、表3と表4に示されるように、子どもの非行抑制力の強弱に父親は強い影響を与えているが、母親については影響がないという結果になっている。この結果は、アメリカの方が日本よりも父親と母親の役割分化があるということを示している。

表3 非行抑制力と父親との認知的な心理的距離の関係 (アメリカ) (数値は%)

	心理的距離 近い	心理的距離 遠い	計
非行に許容的	82.8	17.2	100.0 (233人)
非行に非許容的	90.0	10.0	100.0 (231人)
計	86.4	13.6	100.0 (464人)

$\chi^2 = 5.140 \quad P < .023$

表4 非行抑制力と母親との認知的な心理的距離の関係 (アメリカ) (数値は%)

	心理的距離 近い	心理的距離 遠い	計
非行に許容的	88.6	11.4	100.0 (263人)
非行に非許容的	92.5	7.5	100.0 (239人)
計	90.4	9.6	100.0 (502人)

$\chi^2 = 2.157 \quad P < .140$

## 2) 情緒的側面の心理的距離との関係

表5と表6に示されるように、我が国の場合は、父親に対しても母親に対しても、情緒的な側面の心理的距離が近い子どもほど、非行抑制力が強いことが分かる。しかし、どちらかといえば、父親よりも母親との情緒的な心理的距離の近さが、子どもの非行抑制力の強さと関係しているようである。

表5 非行抑制力と父親との情緒的な心理的距離の関係 (日本) (数値は%)

	心理的距離 近い	心理的距離 遠い	計
非行に許容的	15.6	84.4	100.0 (807人)
非行に非許容的	21.6	78.4	100.0 (472人)
計	17.8	82.2	100.0 (1,279人)

$\chi^2 = 7.311 \quad P < .007$

表6 非行抑制力と母親との情緒的な心理的距離の関係 (日本) (数値は%)

	心理的距離 近 い	心理的距離 遠 い	計
非行に 許容的	20.6	79.4	100.0 (834人)
非行に 非許容的	28.0	72.0	100.0 (490人)
計	23.3	76.7	100.0 (1,324人)

$$\chi^2 = 9.304 \quad P < .002$$

日本の結果と比較して、アメリカの結果は明白である。表7と表8を参照されたい。アメリカの場合は、父親に対する子どもの情緒的側面の心理的距離の遠近は、子どもの非行抑制力の強弱とまったく関係していない。これに対して母親との情緒的な心理的距離の近さが、明らかに子どもの非行抑制力に強さと関係している。

表7 非行抑制力と父親との情緒的な心理的距離の関係 (アメリカ) (数値は%)

	心理的距離 近 い	心理的距離 遠 い	計
非行に 許容的	63.8	36.2	100.0 (235人)
非行に 非許容的	64.2	32.8	100.0 (232人)
計	65.5	34.5	100.0 (467人)

$$\chi^2 = 0.602 \quad P < .438$$

表8 非行抑制力と母親との情緒的な心理的距離の関係 (アメリカ) (数値は%)

	心理的距離 近 い	心理的距離 遠 い	計
非行に 許容的	65.5	34.5	100.0 (264人)
非行に 非許容的	83.6	16.4	100.0 (238人)
計	74.1	25.9	100.0 (502人)

$$\chi^2 = 21.32 \quad P < .000$$

以上の結果を総合してまとめると、以下のようになる。

①日本の場合もアメリカの場合も、母親よりも父親との認知的側面の心理的距離の近さが、子どもの非行抑制力の強さと関係しているといっていよう。このことは、「父親のようになりたい」とか、「父親を尊敬している」などと思っている子どもの方が、そう思っていない子どもよりも非行抑制力が強いということである。

②さらに言うならば、父親よりも母親との情緒的側面の心理的距離の近い子ども、つまり「母親が好き」で、「母親から愛されている」と感じている子どもの方が、そう思っていない子どもよりも非行抑制力が強い。この傾向は、アメリカにおいてより明白である。

③これらのことから、子どもの非行抑制力の形成には、日本よりもアメリカの方が、より父親と母親の役割が分化しているように推測される。

## 2. 子どもの価値観と親子関係

子どもの価値観も、その形成には父親と母親の役割が違っているようである。ここでは、子どもの親との心理的距離（認知的側面のみ）の遠近と、子どもの価値観との関係を述べる。紙面の都合でここでは図表を用いないが、結果を要約すると以下ようになる。

①日本の場合もアメリカの場合も、母親よりも父親との心理的距離の近い子どもの方が「人生は運よりも努力が大切である」という「努力志向的」な考え方をしている。

②日本の場合は、父親に対しても母親に対しても、心理的距離の近い子どもの方が遠い子どもよりも「今よりも将来のために努力する」という「将来志向的」な考え方をしている。しかし、どちらかといえば父親との心理的距離に近い子どもにその傾向が強い。これに対してアメリカの場合は、父親よりも母親との心理的距離の近い子どもの方が、明らかに「将来志向的」な考え方をしている。こと「将来志向」については、日本は父親が、アメリカは母親が影響を与えているという違いが認められる。

③日本の場合もアメリカの場合も、「人生は自分のことだけでなく他の人のことを考えることが大切」という「他者志向的」な価値観の形成には、父親よりも明らかに母親の影響を強く受けているようである。

④以上のことから、日本の場合は、子どもの「努力志向」の形成についての影響力は父親>母親、「将来志向」の形成には父親>母親、「他者志向」の形成には母親>父親という役割の違いがあることがわかる。またアメリカの場合は、「努力志向」については父親>母親の関係、「将来志向」については母親>父親の関係、「他者志向」については母親>父親の関係があるといっていようだろう。このように、国による文化差があるとしても、子どもの価値観の形成に、父親と母親はそれぞれ違った影響力を持っているということは間違がないと思われる。

### 3. 結論として

本稿では、子どもの親との心理的距離の遠近を、父親の場合と母親の場合に分けて、そ

のことが子どもの非行抑制力の強弱や価値観の内容とどのような関係になっているかを検討した。その結果明らかになったことは、親が意識するとしなにかかわらず、親の子どもに対する影響力は父親と母親とでは異なっているということである。

このことを明確に検証するためには、より精緻な分析が必要となるだろう。しかし、現時点で言えることは、子どもの社会化、もしくは「自文化」化のためには、「父親らしさ」も「母親らしさ」もそれぞれが重要な意味を持っているということである。この意味で、前述の日本青年研究所の調査が明らかにした我が国の高校生の「男らしさ」と「女らしさ」の減少傾向は、将来的な意味で問題を残すことになると考えられる。さらにいうならば、日本の子どもたちの「らしさ」の喪失は、親の「らしさ」の喪失と密接に関係しているものと推測される。

#### <参考文献>

1. 中里至正・松井 洋 共著「日本の若者の弱点」、毎日新聞社、1999
2. 中里至正・松井 洋 共著「日本の親の弱点」、毎日新聞社、2003
3. 「非行抑制要因に関する社会心理学的研究」、平成13年度～14年度科学研究費補助金基盤研究(C)(2)、研究代表者 中里至正 平成15年3月



## しつけの意味と過程 —自己決定理論の観点から—

岩立 京子 東京学芸大学教授

### はじめに

現代は「しつけ喪失の時代」あるいは「しつけ無き時代」と言われている。何を目的にし、どのようなしつけをすれば、将来成功するという見通しがもちにくい時代である。幼児教育においては「生きる力の芽生え」を培うことが目標として掲げられているが、これとて具体的なしつけにかかわっていく親にとってはつかみどころのないものとなっている。一方で、子どもの数が減り、多くの注目や関心が向けられて豊かに育つはずの子どもに多くの問題が生じている。これらの状況がしつけをする親をより一層、不安にさせているのである。

筆者が保健センターや公民館などの子育て講座で出会う親の多くは「子どもが言うことを聞かない」「自分の思い通りに子育てができない」などと訴え、「自分は子育てに向かないのではないか」と思い通りにいかない子育てに親としての自信を失いがちである。子育ての楽しさを日常の折々に感じつつ、また、「幼児が親に甘えることは大切だ」「子どもの主体性を尊重すべきである」などの知識も十分にもちつつ、一方で「子どもの欲求を受け入れたいが、どこまで受け入れればよいのか」「甘えを受け入れたいが、甘やかしになって

しまうのではないか」「しつけが結果的におしつけになってしまう」などと困惑し、混乱しているのである。

これらの問いは、子育てや保育において本質的なものであり、専門家としての保育者にとっても基本的に重要な課題となるものである。

子どもの欲求を受け入れることと親の期待や願いでしつけをしていくことはそもそも二律背反的な課題であり、単純に解決できるものではない。親は譲歩したり、妥協したり、説明したりしながら、社会の価値や基準を子どもができるだけ無理なく、納得して自身のなかに取り込むことができるようにかかわっていくのである。

子どももまた、3歳頃までに愛着や信頼の対象である親の意図や感情に気づき、自分の目的や行動を調整する力を芽生えさせていく。しつけは、親からの一方的な過程ではなく、相互的な過程なのである。

このようなしつけの意味や過程、そして、子どもの発達の特徴を理解し、かかわり方を知ることによって、子育ての悩みはいくらかは軽減されるであろうし、そのような理解のもとでかかわりを重ねることによって、子どもと分かりあえる経験をしたり、子育てに喜びやおもしろさを感じるようになるのではな

いだろうか。

子どもの問題が多く指摘されるなか、「家庭のしつけがなされていない」「もっと厳しくしつけられるべきだ」「親の権威を復権させよ」などの声が巷で聞かれるが、子どもの発達やしつけの意味、それらの過程を理解することなく、厳しく強制することはかえって親子の関係性を悪化させ、しつけを失敗させることになる。

ここでは、しつけの意味と過程、そして、しつけがうまくいくために発達の初期、特に3歳頃までにどのような欲求が満たされることが重要なのか、さらに子どもが納得して、社会の価値や基準を自分の中に取りこむために親はどのようにかかわればよいのかについて、自己決定理論の観点から考えてみたい。

### 社会化過程における価値や基準の内化

子どもが育つということは、身体が大きくなる、技能や行動パターンを獲得するという目に見える変化だけを意味するのではない。家庭で、あるいはより大きな社会でうまく機能するための行動に向かおうとする動機や、価値、意志を獲得していくことが基本的に重要である。しつけの目的は、大人が子どもに対して一方的に行動や技術を教え込むことではない。大人は価値や態度を具体的な行動を通して教え、子どもはそれに従うだけでなく、それらを自分自身のものとして取り込み、自らの動機のなかへ統合していくことが必要である。

自己決定理論 (Deci & Ryan, 1985, Ryan & Deci, & Grolnic, 1995) によれば、人間には社会的価値を受け入れたり、社会的行動をした

り、それらを自分自身のものとして取り込んでいく自然な動機づけが生来的にあるという。しつけにおいて重要なことは、社会的な価値や態度、行動を獲得しようとする子どもの自然な傾向をつぶすことなく、社会的に承認された行動をいかに促進するかが重要である。人が外的資源から信念や態度、行動制御を獲得し、これらの外的制御を個人的属性、価値、制御スタイルへと変換していくプロセスを内化というが、この内化を導くことがしつけの最終目標となる。外から「～したほうがいい」あるいは「～すべき」から、子ども自身が「～したい」というように、自分自身の感覚と統合していくことが必要である。人間は生涯にわたり生きる意味を求め、自己を洗練させていく存在であり、自己を発達させながら社会的に伝達された価値や実践を受け入れていくレジリエンスをもっている (Gronick & Deci, & Ryan, 1997)。とすれば、内化の過程は、人間の自然な発達過程ともいえるのかもしれない。

### 内化を導く3つの基本的欲求の満足

外側から提示される価値や基準を内化しようとする傾向を維持するためには、次の3つの欲求がある程度、満足されている必要がある (Gronick & Deci, & Ryan, 1997)。それらは、愛着あるいは信頼の関係性の欲求、達成 (mastery) の欲求、自律の欲求である。

人は生まれたときから他者との間に基本的な愛情関係や信頼感を求めようとする欲求をもっている。ボウルビー (Bowlby, 1985) は、ある特定の対象との間に形成された愛情のきずなを「愛着」とよび、それは時間を経ても、

空間を隔てても永続的に持続する結びつきであるとした。子どもと親との間で繰り返し交わされる心地よさや喜びの表出とその共有によって親と子の間には愛着関係が築かれ、1歳前後より親は子どもにとっての安全基地となっていく。この頃より、子どもは見知らぬ人やものに遭遇し、それが安全か危険かわからないときに、愛着対象の方を見て情報を求めるようになる。つまり、不確かで新奇な事態に際して、子どもは不確かさを解決する手段として親から判断基準となる情報を得ようとするのである。これは、「社会的参照」といわれる現象である。愛着の対象に関して言えば、子どもはかなり早い時期から基準や価値を主体的に取り込もうとする傾向がみられるといえる。また、3歳頃より、子どもは愛着対象である親の行動や周囲の状況の観察を通して、親の目的や行動の計画、感情状態や動機を察知できるようになる。そして、親の意図に合わせて自分の行動を柔軟に調整できるようにもなるのである。以上のように、社会の価値や基準を取り込もうとする傾向は愛着対象に対しては、発達のかなり早期から芽生えてくるといえる。

2つめの欲求は達成の欲求である。達成の欲求とは、人間が生来的にもっている欲求で、環境と効果的に相互交渉するための欲求(White,1959)である。出生直後から、赤ちゃんは泣けば親がミルクを与えてくれる、オムツを替えてくれる、また、声を出せばほほえんでくれる、ものをたたけば音が出るなどの経験を積み重ねていく。このような人やものとの相互的にかかわりを通して、自分が環境に対して働きかけたときに随伴して結果が得ら

れる手応え感のようなものを感じていくのである。このような欲求が満足されたときの誇らしげな表情は、生後1歳8ヶ月ぐらいから顕著に表現され始める。

内化を促進するために満たされることが必要な欲求の3つめは、自律の欲求である。ドシャーム(deCharms,1968)は、行為の原因をチェスの指し手とコマとの関係から指し手として行為の主体になることや指し手として自分の行動をコントロールすることが人間の基本的欲求であるとしている。ドシャームによれば、内発的動機づけを維持するためには、人から動かされていると認知するのではなく、自らの意思でその行為を「選んでいる」という感覚を経験しなければならない。このような感覚が行為を持続したり、新たな取り組みを促すのである。親から生活の大半を世話してもらっている幼児でも「〇〇ちゃん、すごいね、できたね」と言われることで、自律欲求が満足され、自律へ向かう行動が強化される。

このように発達の初期、特に3歳頃までに愛着や信頼の関係性の欲求、達成の欲求、自律の欲求がある程度満たされていることが、これから述べるしつけの効果をより確かなものとしていくのである。

#### 効果的なしつけの方法を知る

先述した3つの欲求がある程度満たされていることは内化の維持、促進につながるが、しつけの文脈で内化をみちびく効果的なやり方(Gronick, Deci,& Ryan,1997)を知ることにも意味がある。

表1に沿って考えてみたい。まず、子ども



の自律をサポートしていくために、①発達に応じた選択肢を提供する、②自分からすることを認め、励ます、③親の統制を最小限にする、④親の予想とは違う見方や感じ方を認めるなどの仕方が考えられる。子どもは2歳前後から、援助しようとする親の手を払いのけ、「自分で（やる）！」「〇〇ちゃんが（やる）！」と主張することが頻繁にみられてくる。親からまだ多くを援助されていても、自分でやっているという感覚が、価値や基準の内化を導く。援助されながらも、自分でできたという自律感は、その行為を強化していくといえる。

次に子どもが考えていることや感じていることを言葉で表現してやったり、整理したり、関係づけたりする仕方で「構造化」といわれるかかわり方である。①子どもにとって最も適切な課題に取り組むことへの期待を伝えること、②なぜ、それがいいのか（悪いのか）の理由を説明すること、そして、③行為に対する結果その他の情報のフィードバックをすることが、内化への動機づけを高めていく。

最後に、幼い子どもが達成経験を積めるために、親は実際に時間と資源を提供し、かかわる必要がある。ほとんどかかわることもなく、口先だけで指示・命令をしたり、叱ったりすることは、内化への動機づけを低下させる。また、子どもの活動に関心や興味をもつようにする。普段、一緒に活動を楽しんだり、暖かいまなざしや関心を向けたり、ケアを与えたりすることで、子どもの内化はさらに促進されていくと考えられる。

表1 しつけにおける効果的なかかわり  
(Gronick, Deci, & Ryan, 1997を改変)

自律のサポート	①発達的に応じた選択肢の提供 ②自分からすることを励ます ③統制を最小限にする ④違う見方や感じ方を認める
構造化	①最適のチャレンジへの期待を伝える ②理由を説明する ③情報のフィードバックを与える
ケアリング	①達成に向けて時間と資源を提供し、かかわる ②子どもの活動に興味をもつ ③温かい関心とケアを与える

#### おわりに

しつけは、一般に大人が子どもに日常生活における行動様式ないしは生活習慣の仕方を身につけさせることと捉えられている。しかし、「身につけさせる」という過程が、親からの一方向的な価値や基準の伝達あるいは押しつけではうまくいかないことは容易に想像できる。それは、どんなに幼い子どもでも自身の欲求や意図をもち、主体的に環境に関わる存在だからである。子どもの達成、自律、愛着の欲求を満たしながら、内化を導くことがしつけの過程で最も重要である。親がこのようなしつけの意味や過程、さらに子どもの発達を理解し、その上でしつけをしていくことができれば、その結果、親も子も心地よいかかわりを積み重ねることができ、子育てのストレスや不安の一部は軽減されるのではないだろうか？

近年、「子育て支援」という言葉が現代社会を表すひとつのキーワードになっている。託児、子育て相談、講演などの支援活動が官民併せて行われている。社会のなかで子どもを育てるという観点から見れば、これらの試み自体は素晴らしいことである。が、子育ての外注化の手段としての支援の利用であるとすれば問題であろう。親を子育て・しつけの主体者、第一義的な責任者とした上で、親がしつけや子育ての意味を理解し、子育てにおける日常の問題を解決できるような支援の実施や支援システムの構築が重要であると思う。

<引用文献>

- deCharms,R. 1968 *Personal causation: The internal affective determinants of behavior*. New York: Academic Press.
- Deci,E.L.,& Ryan,R.M. 1985 *Intrinsic motivation and self-determination in human behavior*. New York: Plenum Press.
- Gronick,Wendy S., Deci, Edward L., & Ryan Richard M. 1997 *Internalization within the Family: The Self-Determination Theory Perspective*, In J.E.Grusec ,& L.Kuczynski (Eds.) *Parenting and Children's Internalization of Values*,135-161, New York:Wiley.
- Ryan Richard M., Deci, Edwards L., & Gronick,Wendy 1995 *Autonomy, relatedness,and the self: Their relation to development and psychopathology*.In D.Cicchetti & D.J.Cohen(Eds.), *Developmental Psychopathology* : Vol.1. Theory and methods,618-655, NewYork: Wiley.
- White,R.W. 1959 *Motivation reconsidered: The concept of competence*. *Psychological Review*,66,297-333.



## 家庭の教育力低下の2つの大きな原因 —子供の教育と民主主義と文明の高度化との関係—

杉原 誠四郎 武蔵野大学教授

### はじめに

「家庭の教育力が低下している」といわれ  
て久しいが、このような傾向は、2つの大き  
な流れのなかで生じているとあってよいであ  
ろう。

(1) 1つは、敗戦を契機として日本の社会  
が民主主義化したがる、そのこと自体はよいと  
しても、民主主義と教育の関係が十分に解明  
されず、民主主義社会のなかで子供への教育  
の考え方が不安定となり、一定しなくなった  
からである。

(2) 2つは、社会が高度に文明化し、衣・  
食・住の条件が有史以来最も恵まれたものと  
なり、もはやこうした生きるための生理的欲  
求は何の努力もなく満たしえ、人間が生きる  
ための条件が変わり、子供の成長・発達を包  
む条件が変わったからである。

以下、このような2つの観点から、家庭教  
育の復権、再建築について考えていこう。

### 民主主義と子供教育との関係

民主主義とは何か。いうまでもなく人間一  
人一人を大切にする主義である。したがって  
人間の国家・社会において当然に尊重される  
べき主義であろう。

したがって子供の教育というとき、そこで  
対象となる子供たちは当然ながら尊重されな  
なければならないことになる。子供への教育は

子供一人一人を大切にするという前提のもと  
に展開されなければならないことになる。

だが、しかし、この命題の下で考えてみな  
なければならないのは、子供への教育におい  
ては、個々の現象において必ずしも子供たちを  
その時その場で直接に尊重することはできな  
い場合があるということである。幼児期、夜  
になれば早々に就寝する生活習慣を身につけ  
させることは、その時点の幼児の健康にとつ  
ても、幼児の将来の成長・発達という観点に  
立っても、極めて重要なことである。しかし  
このとき、幼児がそのような生活習慣を身に  
つけることをいやがったらどうするか。いつ  
までもゲームをしたがったり、親と一緒に起  
きていたがったりしたりするとどうすればよ  
いのか。子供を大切にするとき、それは幼児  
のそのときの希望をそのまま受け入れてやる  
ことであろうか。ほんとうの意味で子供を  
大切にすることは、そういうことではないで  
あろう。

このように子供の教育は、現象的には、そ  
の時その場の子供の意向に背いて特定の行動  
を強制しなければならないことがある。

つまり、民主主義における子供の教育とは  
究極的な意味においては一人一人の子供を尊  
重しながらも、現象的にはしばしば子供たち  
の意向に背いて強制をしなければならないこ  
とがあるということである。つまり、民主主  
義という前提に立っても、子供たちへの教育

は強制がともない、強制があるゆえに、民主主義的教育は成り立ちうるといわなければならない。学校教育法第11条には、学校においては児童・生徒に懲戒を加えることができると規定しているが、ほんらい権利の主体者である子供たちに対して、教育を行うとき懲戒を加えることができることは、子供の教育のこのような本質を見極めているからであり、民主主義における教育も、否、民主主義なるゆえに、このような教育における強制は必要なのである。

このような民主主義と子供の教育とのあいだの問題は、道德教育において最も先鋭的に出てくる。

人間一人一人を必ずしも尊重せず、個人をして社会のために存在することを強調していた民主主義社会以前の非民主主義社会においては、道德教育の意義は道德教育を受ける個人の側からではなく社会の側から説かれることが多かった。社会のために個人が修得し、体現して、社会に迷惑をかけないことが何よりも強調された。そのかぎりでは、道德教育は非民主主義的教育ということになる。そのような観点に立てば、道德教育は個人にとって得にならないことを社会のために犠牲的に受けさせる教育ということになる。したがってそのような観点からは、民主主義社会では、道德教育は力を失うことになる。子供たちへの教育の中心はある意味では道德教育であるから、そのような道德教育の考え方からすれば、民主主義社会では、子供たちへの教育は、原理的にいえばその中心において混迷を避けられないものとなる。

そもそも、民主主義社会における道德教育について改めて原理的に考えてみる必要ができてくる。

それも道德教育は、個人にとって利益にな

らないことを社会のために犠牲的立場に立ってしか受け入れられないものであろうか。「正直」という道德教育上大切な徳目がある。「正直」の反対は「嘘をつく」ということである。そもそも人間はなぜ「嘘をつく」のか。それはその瞬間、嘘をつけばついた本人にとって有利なことが起こるからである。真実のことを話せば生じるであろう困ったことが起こらないですむから、人間はその場で嘘をついて誤魔化し、その困ったことが起こらないようにするのである。したがって嘘をつけば必ず原理的に利得がある。だから人間は嘘をつくのである。

だがしかし、だからといってことあるごとに嘘をついてそうした利得を求め続けたらどうということになるか。その人間にはたちまち「嘘つきだ」というレッテルが貼られ、たちまち周囲の人から信用を失い、その人間は社会的な関係では大変生きにくくなる。

すなわち、嘘をつくという悪徳は、瞬間的には利得をもたらすけれども、長期的には、個々の嘘によって得られる利得よりもはるかに大きな損失をその個人に与えるものなのである。

だが嘘はつねに瞬間的には莫大な利得をその個人に与える。だとしたら人間は、つねに嘘をつきたいという引力に抗して嘘をつかないようにして生きている。

とすると、そのためには強い意志と、行動習慣が必要で、子供の時期はそうした強い意志や生活習慣を形成するための訓練が必要である。そしてその訓練は、瞬間的には必ずしも楽ではなく、はっきりいって苦痛がともなう。つまりその苦痛をともなう訓練こそが道德教育なのである。<sup>11)</sup>

以上のことから、子供たちへの教育において、道德教育も本質的には子供一人一人への

尊重に基づくゆえに行われなければならないものであって、しかもその過程においてはその場かぎりの希望を無視して強制が必要となることがわかる。

このような観点から、戦後の日本の教育史を見てみたとき、はっきり指摘しなければならない忌むべき事件がある。これがすなわち、戦後の日本の道德教育を衰微させた元凶の1つとなっているといわなければならないものである。

それは、戦前の日本の学校の道德の教育教科「修身」の廃止のことである。ポツダム宣言を受諾して降伏した日本は、日本をして民主主義化することを国際的に約し、そのために教育も民主主義的なそれに改変することを強いられた。その際、戦前の道德教育科目「修身」をどうするかという問題があった。日本の教育を民主主義化することを役割とした占領軍は占領が始まると直ちに「修身」の教科書の調査を行った。そしてその結論はどうであったか。それは、一部の教材を除いて「修身」という教科自体は、民主主義と共存するもので、「修身」に述べられている多くの徳目は民主主義社会においても順守されるべきものであるとしたのである。そのかぎり、「修身」は再開されるべきものという前提があった。にもかかわらず、当時東京帝国大学文学部教育学科助教授海後宗臣なる研究者が道德教育の要素をその内容に含む「社会科学」の開設を占領軍に持ち込み、これが決定的な原因となり、「修身」は再開されないままに終わった。海後は保身のためにこのような行動をとったのであろうが、占領期そのことが十分に判明しなかったこともあって、日本の教育史では、「修身」は非民主主義的なので、占領軍が再開を認めなかったという解釈が強固にできあがった。民主主義と共存しうる価

値ある教科「修身」が、非民主主義的ゆえに占領軍によって廃止されたという誤解は、道德教育の実質的崩壊につながった。すなわち「修身」に並べられた徳目が非民主主義的なものという誤解を与え、そしてそこにある方法としての強制も、民主主義教育としてはあってはならないものという、道德教育の根幹にかかわる誤解が一般化したのである。<sup>12)</sup>

民主主義は人間一人一人を尊重し大切にする主義であるということと道德教育の関係があいまいとなり、道德教育は、原理的に崩壊したのである。今日の家庭教育における教育観、そしてその教育の中核にある道德教育観が不安定となり、一定しないことによって、家庭教育も、その意義と方法があいまいになり、そこに家庭教育力低下の1つの大きな原因ができあがったのである。

### 文明の高度化と子供の教育

家庭教育を困難にする原因は、文明の発展高度化それ自体の中にもある。

次の図は、いろいろな学者が言い、大学の心理学の教科書に書いてある人間の基本的な欲求を示したもので、私の大学での教科書『生徒指導の手引（原理編）』で示しているものである<sup>13)</sup>。

これによって説明すると、人間の生きるための最も根源的な欲求ともいえるべき、飢え、渇き、睡眠、排泄の生理的な欲求は、文明の高度化により、いつでも必要なだけ満たしうるようになった。以前は、この基本的欲求を満たすことがそもそも困難で、人間の精神的努力が、この欲求を満たすことに向けてなされた。そこに、人間同士の泣き笑いの展開があり、そこに人間としての生きる力の育まれる場があった。しかし今日、このような第1次欲求は十分に満たされ、そのうえ人間関係

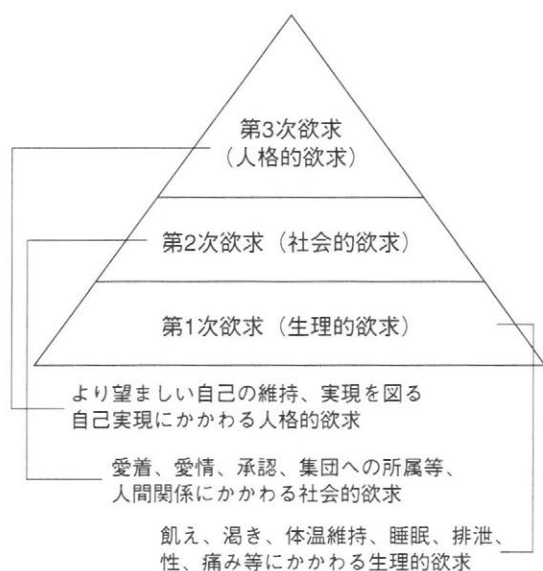


図 3次にわたる欲求

にかかわる第2次欲求がまんまであつたりすると、人間関係で何の精神的格闘をも経ないままに成人になるということがありうる。気が付いてみれば成人となっていたが、しかし、生きる力も身につけておらず、人間同士の泣き笑いの共感の精神能力も十分に育っていないことがありうる。ともすれば家に引きこもる以外にない。引きこもっても、親の収入や蓄えで当面何の痛痒もなく第1次欲求を満たして過ごすことができる。

よって人間の第1次欲求を十分に満たしうる文明の高度化は、それ自体家庭教育を困難にするということがはっきりする。

さらに、家庭教育の内容を考えたとき、家庭教育の力を低下させる原因が、文明の高度化の中にもう1つ別の流れからあることを指摘しなければならない。

将来の健全な成人になるべく行っている子供たちへの教育は、学校教育法の表現を借りれば、その内容に2つのものがある。

学校教育法第77条には幼稚園の目的とし

て「幼稚園は、幼児を保育し、適当な環境を与えて、その心身の発達を助長することを目的とする」を規定してある。これに対し同法第17条には、小学校の目的として「小学校は、心身の発達に応じて、初等普通教育を施すことを目的とする」と規定してある。

すなわち幼稚園の教育目的の中心は「心身の発達を助長する」である。これは生得的な心身の発達というものに対して、教育として助長する行為をさし、基本にあるのは生得的な心身の発達そのものである。これに対し、小学校の教育の中心は「普通教育」であり、その「普通教育」の意味は、子供の教育として心身の発達を助長する教育を除いて逆算して考えれば、先人が開発した文化の伝承を指すものということになる。先人の開発した伝承されるべき文化は、社会的に見れば無限にあり、そのすべてを子供の時代の学校で伝承しようとしているわけではない。すべての子供が、小学校・中学校・高等学校に進学するものとすれば、すべての子供が成人になる前に共通に学ぶべき、伝承されるべき文化の基礎的・共通的内容を、普通教育の内容としているということになる。そしてその内容を小学校・中学校・高等学校の段階において「初等」・「中等」・「高等」としたものであることがわかる。

そこで考えてみるべきは「心身の発達を助長する」教育は、幼稚園のみ規定されていてそれ以降の学校教育に表面上欠けることである。小学校の教育の目的規定に「心身の発達に応じて」という規定はあるが、これはあくまでも「初等普通教育」を小学児童に施すときの方法上の注意を規定したものであって「心身の発達を助長する」そのものの教育ではない。

だが、子供が、幼児、児童、中学生、高校

生として成長発達するとき、「心身の発達を助長する」教育は幼稚園教育に限定されるものであろうか。明らかに否である。

子供は成人になるべく子供の時代に教育を受けるとき、「心身の発達を助長する」教育としてはその最終段階で「親になるための教育」という重大な教育があることを忘れてはならない。

三木露風の有名な童謡に「赤とんぼ」がある。その歌詞のなかに「十五で姐やは嫁に行き」とある。これは明治二十年代の思い出を歌ったものであるが、その姐やは嫁に行く前に、作者の露風を背負って子守をしていたことがわかる。すなわち十五で嫁に行った姐やは嫁に行く前に他人の子供を育ててから嫁に言ったことがわかる。

人間はいうまでもなく哺乳動物であり、赤ん坊が誕生したとき、母親と赤ん坊は強く心理的・生理的に結ばれるように本来はできている。母親は生んだ自分の赤ん坊のにおいを覚え、強く可愛く思い、また可愛く思うことによって幸せに感じるように本来はできている。しかしこのような本来の能力も、人間のような高度な動物の場合、生後、さまざまな経験や体験を通じて（つまり学習をして）補強されなければ開花しない。その本能的なものが何の経験や体験や知識の学習もないままに、十分に顕われるということはありません。そこにはどうしても「心身の発達を助長する」教育として「親になるための教育」が必要なのである。

明治のころ、「赤とんぼ」の童謡に出てくる情景が繰り広げられていたころは、その「親になるための教育」は、地域や家庭の生活の中で自然に行われた。すなわち家庭教育によって、「親になるための教育」が行われ、つまりは家庭教育の在り方が伝えられた。し

かし今日、青年中期にあたる高校生の世代のほとんどが高校に進学し、「高等普通教育」を受けるに至ったとき「親になるための教育」はどこにもなくなっていることが改めて分かる。これでは家庭教育の衰退は大袈裟に言えば制度的に仕向けられていることになる。現在、高等学校には「家庭科」という男女必修の科目があるが、このような構造的欠陥の自覚がないため「親になるための教育」はその片鱗しか扱われていない。これでは家庭の教育力は衰退するばかりである。

<注>

- (1) このような道徳教育と個人との関係については杉原誠四郎「日本の道徳教育—韓国から見て」『武蔵野女子大学紀要』第34号2001年を参照。
- (2) 久保義三『対日占領政策と戦後教育改革』三省堂1984年197～204頁、片上宗二「社会科教育」明星大学戦後教育史研究センター「戦後教育改革通史」明星大学出版部1993年181～196頁、井上敏博ほか共訳ロバート・キング・ホール「新生日本の教育（第2章）『戦後教育史研究』明星大学戦後教育研究センター第4号1987年、を参照。
- (3) 杉原誠四郎『生徒指導の手引（原理編）』時事通信社2003年38頁



## メディアと子どもの脳の発育不全

森 昭雄 日本大学文理学部教授

### はじめに

私たちを取り巻く環境は、IT (Information Technology: 情報技術) 化され非常に便利になってきました。

最近、大きな社会問題の一つとして、幼児・児童期からテレビゲームを長時間行っていると「攻撃的になる」、「引きこもりになる」、「虚構と現実の区別がつかなくなる」など、子どもに悪影響が及ぶことが報告されています。例えば、子どもたちのなかには深夜までテレビゲームをやってしまい、朝起きることができず、学校を休んでしまうことが多くなり、やがて学校がいやになってしまう子どもがいます。また、格闘系のテレビゲームなどは、子どもが暴力的に振舞うことを助長している可能性もあります。近頃は、ちょっと注意をされただけで、いとも簡単に人を殴り殺してしまうような事件がおきるなど、命の尊さを全く知らない少年少女が大変多くなってきています。この原因の一つとして前頭前野の機能低下が挙げられます。先天的な前頭前野の神経細胞の欠落は、将来において凶悪犯罪を引き起こす確率が非常に高いことがよく知られています。

また、幼児・児童期に長時間のテレビゲームやパソコンのやり過ぎから、前頭前野の神

経細胞の機能低下が生じ、前頭前野の働きの1つであるワーキングメモリ (作業記憶) の低下を引き起こし、その結果学力低下を導くものと考えられます。また、この前頭前野の低下の最悪の場合には、凶悪犯罪を引き起こしてしまう可能性も考えられます。

著者は、現在の学力の低下の最も大きな原因は、テレビゲーム、テレビ、ビデオやパソコンの長時間使用によるものであると確信しています。ここでは、紙面の制限からテレビゲーム、パソコンの影響について述べたいと思います。

### 前頭前野の働きとβ波の低下

大脳皮質の前頭前野は、特定の感覚や運動と対応した活動を示すことはなく、複雑な運動を組み立てたり、ものごとの順序や注意の方向を決定したりしています。また、前頭前野は創造性、理性、ものごとの手順、意思決定、思考、ワーキングメモリなどに密接に関わり、認知機能にとって極めて重要な領域でもあります。さらにヒトが動物的にならないように古い脳に対して常に抑制をかけている所なのです。

前頭前野の働きは、脳波の周波数成分のβ波の低下と密接な関係があります。このようなβ波の低下は、痴呆の高齢者で著しいこと



を報告してきてきました<sup>1)</sup>。これまで、最近の追加実験も含めて970例のデータからテレビゲームを行った際の脳波を $\beta$ 波成分の出現様式から4タイプに分類しました<sup>1, 2)</sup>(図1)。

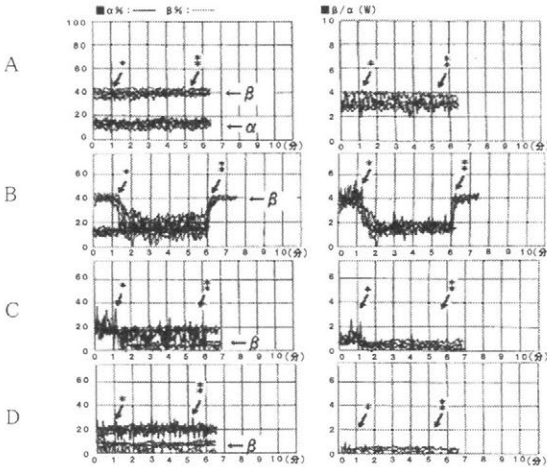


図1 前頭前野の $\alpha$ 波および $\beta$ 波の積分波形(3秒毎)の出現様式から分類した4タイプ  
ノーマル脳(A)、ビジュアル脳(B)、半ゲーム脳(C)、ゲーム脳(D)。  
※: ゲーム開始, ※※: ゲーム終了

## $\beta$ 波の出現様式から4タイプの分類

### A) ノーマル脳タイプ

このタイプは、テレビゲーム開始前の前頭前野における $\beta$ 波が、高いレベルを維持しています。これは、テレビゲームを開始しても、常に前頭前野の活動が高い活動状態を示しています。このタイプは、ほとんどテレビを見ず、テレビゲームの経験がない者です。

### B) ビジュアル脳タイプ

このタイプは、テレビゲーム開始前の状態は、ノーマル脳タイプと同様ですが、テレビゲーム開始とともに、前頭前野の $\beta$ 波が一気に減少してしまう者です。このタイプは、テレビゲームの習慣性はほとんどなく、テレビやビデオを1日に1~2時間見ている者に多くみられました。

### C) 半ゲーム脳タイプ

このタイプは、安静状態でも前頭前野の $\beta$ 波が $\alpha$ 波のレベルまで低下し、それらが混合している者としてしました。これは前頭前野の活動状態においては高齢者の痴呆患者<sup>1, 2)</sup>と同じような状態で $\beta$ 波の低下を示しています。ただし、高齢者の痴呆状態の場合には脳中のいろいろな個所で梗塞が起こっている可能性が高く、また、海馬の細胞の死滅も大きく関係していることが考えられ、子どもや青年層の場合とは大きく異なります。

半ゲーム脳タイプでは、笑わない、しゃべらない、週に数回の忘れ物がある者が多いようです。彼らの自己報告によると、テレビゲーム以外は集中力があまりよくないそうです。

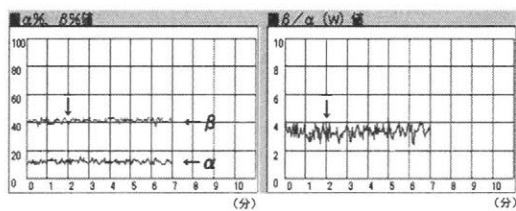
### D) ゲーム脳タイプ

このタイプは、 $\beta$ 波の出現が完全に $\alpha$ 波レベルよりも低下し、顕著な $\beta$ 波の減衰がみられる者としてしました。このタイプには半ゲーム脳タイプと同様に、笑わない、しゃべらないで、「自分はよくキレるタイプだ」と報告する者が多くみられました。また日頃からボーっとしている時間が長く、テレビゲーム以外に対しては集中できず、物忘れは毎日のように多く、時間にルーズである傾向がみられました。

## ノーマル脳タイプと痴呆者の $\beta$ 波の出現様式

図2は、ノーマル脳タイプでは $\beta$ 波と $\alpha$ 波との差が大きいが、痴呆者の場合には $\beta$ 波の低下が顕著で $\alpha$ 波と重なっている半ゲーム脳状態と同様であることを示しています。 $\beta/\alpha$ 値は、ノーマル脳タイプは約3.5で、痴呆者では約1.0でした。

ノーマル脳



痴呆者

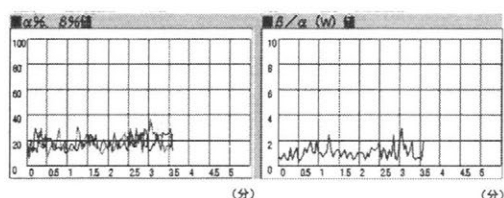


図2 ノーマル脳と痴呆者のα波とβ波の関係

痴呆患者の場合は、β波が低下し、α波と重なる。  
図中の矢印はゲーム開始点を示している。

小学生のゲーム脳タイプ

図3は、小学生のゲーム脳タイプの2例を示しています。Aの場合は9歳で、幼児期5歳から3時間毎日テレビゲームを行っていました。テレビゲームをやっている時は生き生きしているが、3人で果物の名前を記憶していき新たに果物の名前を足していくゲームをやらせると、一回りで忘れてしまいパニック状態になってしまいました。この被験者の場合は、ほとんど笑わず自己主張が強く、人の話をきちんと聞くことができませんでした。Bの場合はAと同様に毎日3時間ゲームをやっている、これも完全にゲーム脳でした。眼には力が無く疲労感があり、しゃべるのが非常に遅いのです。さらに、果物の名前を記憶していくゲームでは3人でやらせると2回まで覚えられましたが、それ以上は記憶することが困難な状態でした。A、Bともにβ/α値

は1以下を示していました。

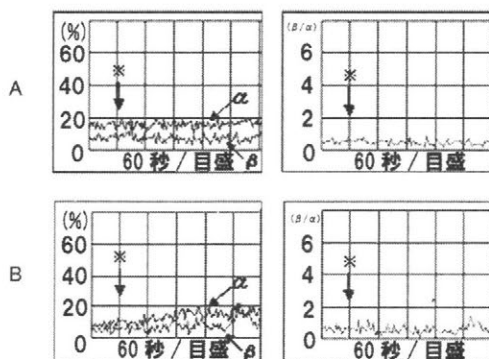


図3 小学生のゲーム脳タイプの例 A) 9歳, B) 11歳 ※: ゲーム開始

ノーマル脳タイプの脳神経回路

テレビゲームを行っているときは、次の動作の手順を考えながら意思決定を行うために前頭前野が活動しており、そのためにβ波の活動が低下しなかったものと考えられます。前頭前野は側頭連合野や頭頂連合野と神経連絡があることが知られています。そのため、形や色、位置関係が認知されると、それらは前頭前野に情報が行くようになっています<sup>2)</sup>(図4)。

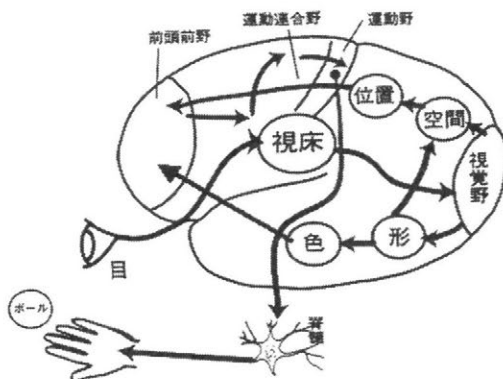


図4 ノーマル脳タイプのテレビゲーム時の簡略化した脳神経回路

ゲーム脳タイプの脳神経回路

ゲーム脳タイプでは、幼稚園児あるいは、小学校低学年から大学生になるまで継続的にゲームを行っている者に多く、ゲームに適応し、無駄な神経回路は省略されます。すなわち前頭前野はいちいち思考することでは反応が遅れてしまうのです。結果的には、前頭前野の細胞は一気に働かなくなるものと考えられます(図5)。その結果、図6に示すように前頭前野の発育不全が生じ、古い脳である辺縁系に対して抑制が効かなくなり、本能的行動が起こりやすくなります。

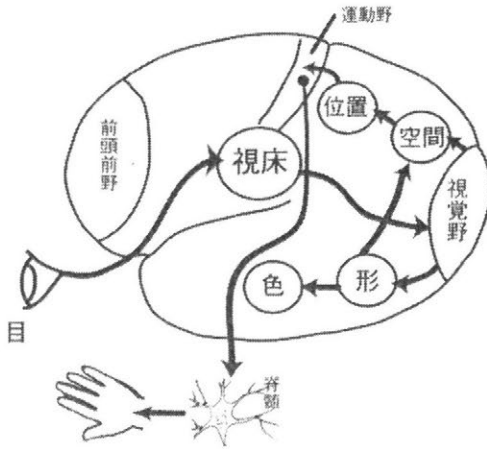


図5 テレビゲームに熟練したゲーム脳タイプの簡略化した脳神経回路

発育不全で抑制が効かなくなった前頭前野

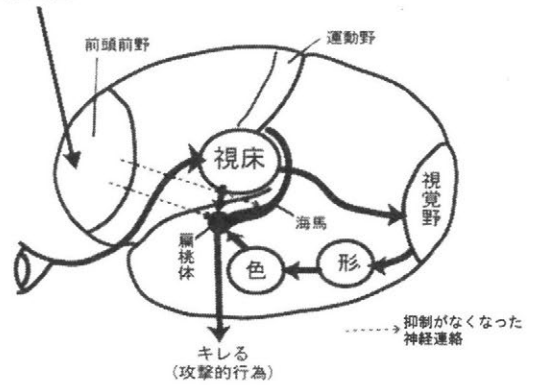


図6 ゲーム脳タイプがキレやすくなる脳神経回路  
視覚情報が一気に扁桃体を興奮させる。

テレビゲームを30分行ったときのβ波の変動

図7は、ビジュアル脳タイプの女子大学生にテレビゲームを30分間させたときのα波とβ波の関係、ならびにβ/αの関係を示しています。ゲーム終了後、β波は元のレベルまで回復することはなく、さらにβ/α値は低下しました。このことは、テレビゲーム30分継続することにより、前頭前野の機能回復が遅れることを意味しています。β波が低下して半ゲーム脳以下の状態であるときにはワーキングメモリ(作業記憶)の働きが非常に低下しています。このような状態で子どもが新しいことを学習しようと思っても、なかなか記憶しにくい状態です。

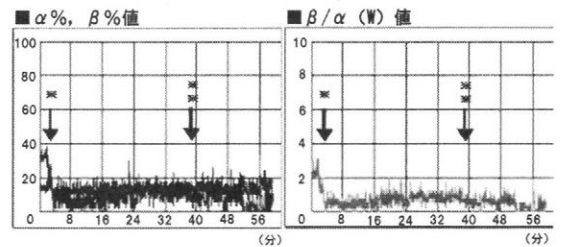


図7 ゲームを30分行った後のβ波の回復

※: ゲーム開始, ※※: ゲーム終了後一点集中

精神活動に関与する脳の化学伝達物質

前頭前野の働きには、ニューロン間の接合部分であるシナプスにおける化学伝達物質が関係します。化学伝達物質としてはいくつもの種類があるが、そのなかでもドーパミン神経線維（図8-a）とセロトニン神経線維（図8-b）、ノルアドレナリンが挙げられます<sup>3)</sup>。ドーパミンやノルアドレナリンのような神経伝達物質も、アミノ酸誘導体に含まれており、これらもホルモンとして働くこともあります。

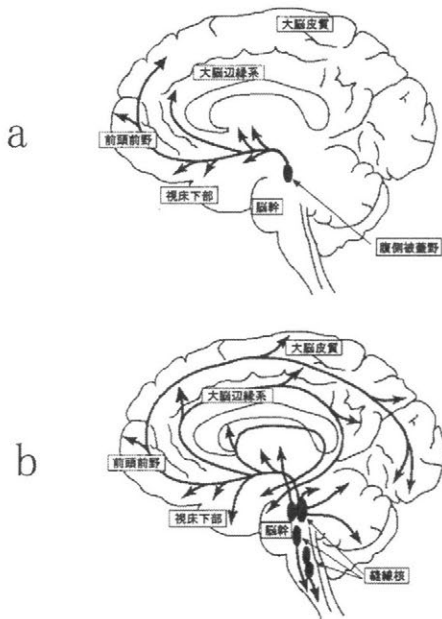


図8 ドーパミン神経 (a) とセロトニン神経 (b) の脳内の投射系

ドーパミン神経線維が脳幹から辺縁系そして前頭前野へと伸びていてドーパミンによって前頭前野の神経細胞が活性化され、創造性、理性、的確な意志決定ができるようになっていと言われています<sup>3)</sup>。しかし、テレビゲ

ームや携帯型ゲームなどによってこの働きが狂ってしまうものと考えられます。この原因の一つとして、例えばビジュアル脳タイプの場合には、テレビゲームからの強烈な視覚性入力と素早く指を動かすための神経ネットワークが形成されてくるものと考えられます。これまで、サルなどの実験でドーパミンを抑える薬物を前頭前野に注入すると、遅延反応の成績が悪くなることが報告されています<sup>4)</sup>。このことは前頭前野のドーパミンの働きが抑えられることで機能低下することを意味していると思われます。しかし、ヒトの場合タスクの違いはあるが、ドーパミンが正常範囲内でセロトニンが低下し、セロトニン欠乏状態が前頭前野の機能低下を引き起こしている可能性が考えられます<sup>5)</sup>。

実際、テレビゲームを長期的に行うことによって、前頭前野の神経細胞の活動に対してドーパミンおよびセロトニンがどのような影響をおよぼしているかを調べました。半ゲーム脳タイプとゲーム脳タイプの大学生7名を対象に、血液中のドーパミンとセロトニン（血漿を低温（4℃）条件下で1500rpm、10分間、血漿分離）の測定を行いました。その結果、2名の半ゲーム脳タイプと5名のゲーム脳タイプのドーパミンは $5.95 \pm 2.48 \text{ ng/ml}$ （正常値： $1.8 \sim 7.7 \text{ ng/ml}$ ）、セロトニンは、6/7名が $0.01 \mu\text{g/ml}$ 以下で、1/7名が $0.02 \mu\text{g/ml}$ であり、7名全員が異常値（正常値： $0.04 \sim 0.35 \mu\text{g/ml}$ ）を示しました。

このように、例数は少ないがゲーム脳タイプおよび半ゲーム脳タイプはセロトニン欠乏状態であり、ドーパミンに関しては、正常範囲でした。

特にゲーム脳タイプの場合、セロトニン欠乏状態であるためにテレビゲーム中の $\beta$ 波の顕著な低下はほとんど引き起こすことができなくなってしまっているものと考えられます。ゲーム脳にキレやすいタイプが多いのは、前頭前野におけるセロトニンの量が不足し、ドーパミンの働きに対して抑制が効かなくなっているものと考えられます。

ビジュアル脳タイプはテレビゲーム中において前頭前野の $\beta$ 波低下を示したが、これはセロトニン神経が働いてドーパミン神経を抑制することで低下したのかもしれませんが。また、ドーパミンの抑制には、GABAという化学伝達物質の関与も考えられます。しかし、今のところ、このように劇的な脳の神経回路遮断について報告されていません。いずれにしても、前頭前野のニューロン活動に対して強烈なスイッチオフを行う場所が存在していると考えられます。

テレビゲーム中における左右前頭前野の働き

脳は右脳と左脳の両半球から成りたっているが、特に前頭前野においては働きが少し異なる知見を得ました。

図9は、17歳の男子高校生のゲーム脳タイプの被験者です。

この被験者は、小学校1年生からテレビゲームを毎日2～3時間続けていました。

右脳と左脳で比較すると右脳の前頭前野の方が極端に $\beta$ 波の低下が見られました。

図10は大学2年生のビジュアル脳タイプの被験者で、1日おきに3回実験を行ったが、右脳の $\beta$ 波のみが顕著に低下しました。すなわち、ゲーム中の右脳と左脳の働きに大きな

違いがあることが明らかになっています。この現象は、なぜ起こるのかについては現在のところ不明であるが、右脳と左脳とのセロトニン神経の活動の違いによるものかもしれません。ゲーム依存状態になる過程において、最初は右脳の前頭前野の機能低下が生じ、半ゲーム脳状態に、さらに進行すると、左脳の $\beta$ 波の低下が生じ、ゲーム脳状態に移行していきます。重要なのは右脳の前頭前野によって相手の感情を読み取ったりすることです。これが、右脳前頭前野の低下によって相手の思いやり、自己コントロール、理性、道徳心や反省などの消失をとまなうようになってくるものと考えられます。

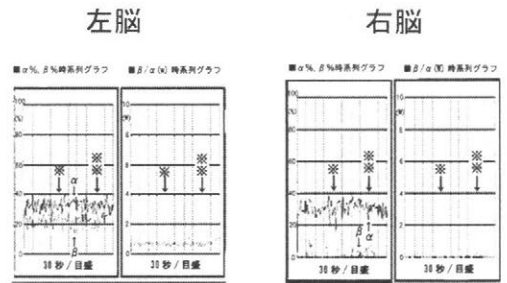


図9 右脳・左脳から同時記録した $\alpha$ 波と $\beta$ 波の関係  
 テレビゲーム1～2日/週 1～2時間/日。  
 被験者：男子高校生 17歳 ※：ゲーム開始，※※：ゲーム終了

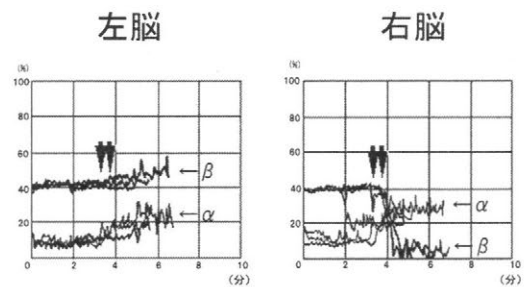


図10 ビジュアル脳タイプが1日間隔で3回ゲームを行った時の $\alpha$ 波と $\beta$ 波の関係

安静時のビジュアル脳と  
ゲーム脳の前頭前野の働き

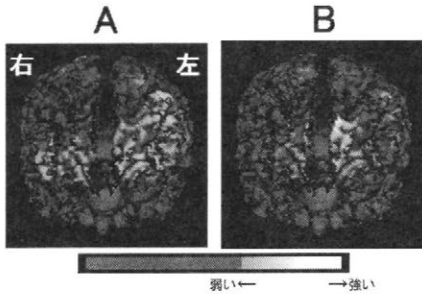


図11 128chで記録した安静時の前頭前野の活動

A:ビジュアル脳タイプ B:ゲーム脳タイプ

これは、大学生を被験者として128チャンネルで頭皮上の広範から脳波を記録した前頭前野の働きを示しています。図11-Aは、ビジュアル脳タイプで、ゲームを開始すると $\beta$ 波の低下を引き起す現象がみられます。安静状態では、左右の前頭前野の活動は高まっています(白い部分)。これに対して、図11-Bは、ゲーム脳タイプで、左脳の前頭前野内側部は活動していますが、全体的には左右ともに前頭前野は低下した状態です。

パソコン使用前後の前頭前野の働き

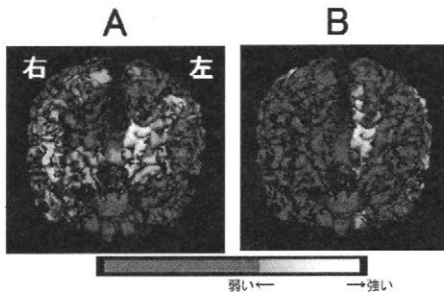


図12 パソコン使用前と後における前頭前野の活動

A:安静時 B:30分後

これは、中学3年生を被験者として前頭前野の活動を調べたもので、パソコン使用前は左右の前頭前野の活動は見られるが、パソコン使用后30分では、右脳の活動は顕著に低下し、わずかに左脳の前頭前野内側部に活動が見られるだけです。この現象は他の例においても多く認められます。このことから、子どもたちの場合には、パソコンの使用は40分から50分で必ず休みを入れることが必要であると思われます。したがって、パソコン使用後は授業に対する集中力低下が生じ、ワーキングメモリの働きも低下します。学校における情報の授業においては、パソコンを使用した後の授業は、音楽とか体育の授業をとり入れ、前頭前野を活性化させることが重要であると思われます。

ゲーム脳の回復法・パソコンとの共存

小学校1年生から大学2年生まで週5回2～3時間テレビゲームを続けてきた男性のゲーム脳タイプの被験者に対して、お手玉を3個で行かせたところ、その効果は2週間目辺りから現れました。3ヶ月目からはテレビゲームを全くやらなくなり、6ヶ月で完全にビジュアル脳タイプまで回復することができました。この時点では彼の表情は非常に豊かになり、笑いや冗談がでるなど人が変わりました。週末は、自然を求めて2、3時間サイクリングを楽しむようになりました。このようにゲーム脳でも、運動によってセロトニン神経を活性化することでゲーム脳を脱することができるものと思われます。

重要なことは、テレビゲームは、幼児期にはさせないことです。小・中学生の場合は、

毎日の場合では1日15分まで、休日は30分までとすること。ゲームをしたら3倍読書させ、手書きで感想文をまとめさせる。

パソコンの場合には小学生では1日40分前後とすること。家庭では30分以内とする。中学生の場合も小学生と同様であります。もしパソコン使用が必要な場合には、40～50分で15分ほど休みを入れ2時間以内とすることがよいと思います。その他、読書、音楽、書字（日記をつけたり、文章を書いたりすること）、俳句などは前頭前野を活性化させることができます。

シナプス形成. *Clin Neurosci* 2003; 21(6): 622-25.

- 10) Jacobs BL, Azmitia EC. Structure and function of the brain serotonin system. *Physiol Rev* 1992; 72: 165-229.
- 11) Jacobs BL, Fornal CA. 5-HT and motor control: A hypothesis. *TINS* 1993; 16: 346-52.
- 12) Portas CM, et al. On-line detection of extracellular levels of serotonin in dorsal raphe nucleus and frontal cortex over the sleep/wake cycle in the freely moving rat. *Neurosci* 1998; 83: 807-14.

#### <文献>

- 1) Akio Mori, Masako Iwadate, Yukio Endo and Tomoko Ashizuka. The relationship between computer game playing and electroencephalographic activity in the prefrontal cortex. *Health and Behavior Sci* 2003; 2(1): 59-69.
- 2) 森昭雄. 『ゲーム脳の恐怖』NHK出版 2002
- 3) 有田秀穂. 『セロトニン欠乏脳-キレる脳・鬱の脳をきたえ直す-』NHK出版 2003
- 4) Sawaguchi T, Matsumura M, Kubota K. Dopamine enhances the neuronal activity of spatial short-term memory task in the primate prefrontal cortex. *Neurosci Res* 1988; 5: 465-73.
- 5) 森昭雄, 岩館雅子, 瀬戸真弓. テレビゲーム依存症と前頭前野. *Clin Neurosci* 2004; 22(6): 710-712
- 6) 鈴木映二. 『セロトニンと神経細胞・脳・薬物』星和書店 2000
- 7) 有田秀穂. セロトニン神経の活動特性と意義. *Clin Neurosci* 2003; 21(6): 626-30.
- 8) Linnoila VMI, Vikkunen M. Aggression, suicidality and serotonin. *J Clin Psychiatry* 1992; 53: 46-51.
- 9) 成田正明, 岡戸信男. セロトニン神経の発達と



# 家庭崩壊を促し子供を不幸にする ジェンダー・フリー

篠原 駿一郎 長崎大学教育学部教授

## はじめに

家庭の教育力が低下している、と言われるが、そもそも家庭そのものが崩壊の危機にあるのではないか。崩壊しつつあるものが、その本来持っていたあるいは持つべき力を失いつつあるというのは、いわば必然的なことで、まずは家庭の崩壊そのものが問題にされなければならないだろう。したがって、家庭が本来の力を取り戻せば、教育力の復権にも希望が見えてこようというものである。

このテーマに関しても、様々な視点や多様な議論が必要であろう。小論ではフェミニズムの根本イデオロギーである「ジェンダー・フリー」を取り上げ、それがいかに家庭を崩壊させ、ひいては子供の不幸を招くことになっているかを論じてみたい。また、その際、生物としての人間が、その本性に従って社会をそして文化を形成するという、いわば動物的自然としての人間を論拠にして考えてみたい。

## 1. フェミニズムとジェンダー

人間がまぎれもなく生物の種の一員である以上、人間は生得的な本性を持っていると考えるのは（「生得的」や「本性」という語を普通に解釈する限りは）常識的なことである。

人間は大きな脳を持ち言語を操ると同時に、大きなペニスを所有し季節を選ばず発情し生殖活動を行う。そして、男と女もまた、人間として共通の本性を多々有するが、同時に多くの生得的な性差を備えていることは明明白白の事実であろう。たとえば、一般的には、男は筋肉を発達させ女は脂肪を蓄える。そして、男は産ませる性であり女は産む性である。このような生物学的な性区分を、とりあえず「セックス」と呼ぶことにしよう。

もちろん、人間にとってのストーリーはここで留まることはない。神の目から見ればどうだかわからないが、われわれ人間は、自意識的には、精神的な領域を有していると思っている。われわれの意思は本性としてのセックスを、自在にとはいえないが、ある程度はコントロールできると自覚している。そして、そのような個人の意思が集団として統合されていくが、それがまさに「社会」や「文化」と称されるものであろう。したがって、男と女のストーリーに限定すれば、「男性」や「女性」、わかりやすく言えば、「男らしさ」や「女らしさ」によって表現されるような精神的な活動の領域が存在することになる。このような領域、すなわち、社会的・文化的な性差が、謂う所の「ジェンダー」である。

戦前の女権拡張運動を越えて戦後に大きく



発展してきたフェミニズムの運動は、このようなコンテキストで考えてみると、セックスの領域を可能な限り縮小し、ジェンダーの部分をできるだけ拡大して解釈しようとした運動であると捉えることができよう。そして、男と女は、本質的に、排泄や妊娠出産といったきわめて限定された領域の差に過ぎないと主張するまでになる。最も過激な論者は、いずれ医学の発達で人工子宮などを実現した暁には、女性は生殖から開放され、真に男女平等の社会が実現するだろうとまで極論するに至る。

## 2. 性自認の先天性

ところが、男と女の生物学的性差は単なる身体的な外形や機能に留まらないことが近年次第に明らかになりつつある。それは「性自認 (gender identity)」という問題である。これは、「ジェンダー」とは言いながら、かなり先天的に形成される男女の資質であることが解明されつつある。それによれば、胎児期に性ホルモンなどの働きによって、すなわち先天的に、性自認が形成されるということである。逆に言えば、性ホルモン異常などによって神経核が正しく形成されなかった場合には性自認に異常をきたすということである。全国に数千人いると予想される性同一性障害の人の存在は、したがって、性自認が基本的には先天的なものであることを示唆しているといえよう。なぜならば、子供は生まれたときの生殖器の外見に従って男あるいは女として育てられるわけだが、仮に男らしさや女らしさが後天的に形成されるのであれば、子供は生殖器の外見どおりに男性あるいは女性の

性自認を形成するであろうから、性同一性障害は起こりようがないはずである。<sup>(1)</sup>

すでによく知られた話だが、カナダで割礼に失敗してペニスを失った男の子が性科学者のジョン・マネーの性自認の人体実験に付されたということがある。マネーは性自認が後天的に形成されると信じ、少年をその精巣も摘出して女の子として育てようとした。しかし少年は、自分をどうしても女性として自認出来ず、結局は男性に戻ることでその危機を乗り越えようとしたということである。多くのフェミニストたちが尊敬するこのマネーの研究は犯罪的なものとも言えるであろう。

このような事実が示していることは、人間の性は、生物学的性そのものが、身体的な性と、いわば、脳の性ととの両者からなるということである。これはいずれも生物学的なセックスに所属する領域であろう。そのことは、フェミニストたちが、社会的な性 (ジェンダー) を可能な限り拡大解釈しようとした意図を裏切って、むしろジェンダーの部分はかなり少ないのではないかということを示唆している。

## 3. ジェンダー・フリーの危険性

こういう風に考えるべきではなからうか。人間は数十万年の進化の歴史を経て現在のホモ・サピエンスに到達した。その進化の理由や動因は何であれ、われわれが身体的に、あるいは本質的に、生物学的に条件付けられていることは紛れもない事実である。しかしながら、人間は自らホモ・サピエンス (叡智ある人) と称するだけあって、他の近縁の霊長類の中では際立って高度な社会や文化を形成

してきた。それには男らしさや女らしさといった、男性であることや女性であることをより強調した、後天的な領域が含まれる。それを狭義の「ジェンダー」と呼んでもよいであろう。

しかしながら、とは言っても、ジェンダーがまったく恣意的なものということとはできない。それどころか、ジェンダーは身体的なあるいは脳的な性差に依存しあるいは基づいて形成されるのではないだろうか。しかもそのようにして形成されてきたジェンダーは、恣意的であるとして非難されるべきではなく、むしろ文化形成の核として積極的に評価されるべきであろう。要するに、男らしさや女らしさは大切な文化の核だということである。

男や女の服飾はそれぞれの性の身体の特徴を際立たせ強調したものであろう。男や女の言動や立ち居振る舞いはそれぞれの性の脳の性自認をいっそう増幅させたものであろう。生物学的根拠なしに男らしさや女らしさが作られるわけではない。セックスとジェンダーとは不即不離の関係にあるものであり、われわれが条件付けられたセックスを逃れることができないならば、ジェンダーを、その中身は変化するにしても、逃れることはできないし、その必要もない。

さらに、男女のセックスやジェンダーの相違は、まさに男女の結合を強めるものである。言うまでもなくそれは家庭に結合の強さを与えるものである。自立した男と女の同質的な、そして愛情によって結ばれた関係こそがあるべきカップルの姿である、というのは絵空事である。むしろ男女の異なる存在が相補うことこそ強い絆を生むものと言えるのではない

か。所詮人間とは、お互いに依存しあって助け合うものというのが本来の姿であろう。

ジェンダーを矮小化しそれからフリーになるという「ジェンダー・フリー」というイデオロギーは、いわば、人間の文化の根幹を危うくするものであり、これから論ずるように、家庭の崩壊や子供の不幸を招来する危険思想であると言えよう。

#### 4. 性別役割と性差別

さて、「ジェンダー・フリー」と重要な関係にあるのは「性差別」という概念である。すなわち、フェミニストによれば、ジェンダーを重要視することは、性別による役割の分担が固定することになり、それは性差別である、というわけである。恣意的なジェンダーによって女を家の仕事や子育てに縛りつけておくのは、社会や男性による女性差別であると非難する。前節で、ジェンダーが恣意的なものではないということを論じたので、ここでは性差による分業が果たして差別であるかどうかということを考えてみたい。

少し抽象的な話になるが、そもそも「差別」とは何であろうか。われわれは様々な差異を持って生まれついている。そのことは誰も認めざるを得ない。あるものは植物を育てることに長け、農業を仕事として選ぶ。また、他のものは物作りに秀でて職人としての仕事を選ぶ。これはどちらも社会にとって重要な仕事であり、ここには両者の本性に基づいた区別があるが差別はない。どちらも同様に尊重されてしかるべきであろう。これは、たとえば、国家レベルでの国際的な分業についても言えることである。

同じように、男性がその有利な資質を生かした仕事をし、女性がやはりその特質を生かした仕事をするに何の不自然さもないであろう。キャリアを積み重ねてきた女性が要職についた場合、しばしば、女としての力を発揮していい仕事をしたい、とインタビューに答える。どちらも社会的な仕事であればこのような男女の差異にフェミニストも異議は差し挟まない。

それならば、なぜこれが夫婦間の分業になれば差別になるのか。男は社会で働き女は家庭の運営や育児に専念するというのはなぜ差別なのか。この差別意識の根底には二つの前提がある。一つは、家事や育児はレベルの低い仕事であるということである。家事は現代では簡略化されているし手抜きをしても大事無い。育児は保育所などに預けたほうが合理的だし、子供の社会性の育成にもプラスになる、というのである。もう一つの前提は、家事や育児には賃金が支払われない、ということである。フェミニストは、しばしば、家庭の仕事がアンペイド・ワークだと言いつる。

こうして、家事や育児はお金にならないつまらない仕事、女性にとって本当に自己実現できる価値ある仕事ではないという社会的イデオロギーが出来上がってしまっているようである。

したがって、家庭の雑用は男女が共同で片付けるべきだし、政府は子供を預ける保育所をもっともっと作るべきだということになる。男女差別という意識はこのようなイデオロギーに支えられているのである。

## 5. 家庭の崩壊は救えるか

家庭の崩壊を救えるかどうかということは前節で論じたイデオロギーにどう立ち向かうかにかかっている。まずは、家庭の仕事はつまらない仕事であるかどうかを考えてみよう。これはフェミニストの偉大な先覚者の一人とされるアメリカのベティー・フリーダンが「新しい女性の創造」という著書で先鞭をつけた思想である。彼女は詳細なフィールド・ワークによって中産階級の主婦たちがいかに退屈したつまらない日々を送っているかを詳細に論じた、かなりイデオロギー性の強い研究である。

しかしながら、家族の健康管理や安らぎを提供することがつまらない仕事であるのかどうか。子供が元気に学校に通い、また遊びから帰ってきたときに笑顔で出向かえその日の出来事の話聞いてやるのがつまらない仕事であるのかどうか。このような地味かもしれないが重要な女らしい仕事が軽視されるようになったのは、フェミニストたちの功績であろう。

次に、家庭の仕事は報われないかどうかが問われる。たしかに、お金にはならない。これは何でも金に換算しないと価値評価ができないわれわれの卑しさの一面であろう。資本主義には様々な長所もありわれわれを豊かにしてくれたが、このような貧しさも持ち合わせているのであろうか。とは言っても、われわれも日々の生活で金のことばかりを考えて過ごしているわけではないのであって、少し虚心に省みれば、お金が支払われない価値ある仕事はたくさんあるものである。もっと家

事や育児のようなアンペイド・ワークの評価を積極的にすべきではないだろうか。

また、たしかに経済力がなければ社会において、また男性に対して弱い立場におかれることは否めない。とりわけ子育て終了後や結婚の破綻後の女性の弱い立場が問題になるだろう。しかしその問題は、解決策を女性も金になる仕事をすべきだという方向に求めるべきではないだろう。働きたい女性あるいは女性が子育てが終わった後に社会的な仕事に就労できるような柔軟な社会を作ることや、そのことへの国家的支援の方向に解決策を求めるべきであろう。

#### 6. 子供をしあわせにできるか

おそらく、家庭の仕事で最も重要なのは子育てであろう。子供の健全な育成にとって必要なことは、絶対的な愛情を注いでくれる人の存在である。そしてその役割を果たす最も重要な位置にいるのはもちろん母親であろう。小論の前半でも長々と生物学的な話をしたが、人間の胎児が十か月という長期にわたり母親の胎内に棲み心音を聞いて育ち、生まれた後も長い間その胸に抱かれ、また心音を聞きながら乳を飲むという生物学的な事実を軽視してはなるまい。アメリカには、チョッキのようなものに哺乳瓶を取り付け男性が母親のように授乳する装置があるそうだが、ついでに母親の心音を入れたマイクロチップでも埋め込めばうまくいくのだろうか。このようなチョッキは悪い冗談としか思えない。

昨今の少年たちの犯罪のニュースを聞くにつけ子供たちの情操の不安定さが気になって仕方がない。彼らの情緒不安定や現実感覚の

欠如の一番の原因は、事件現場の学校の教師の不注意といったことではないであろう。これは一つにはテレビや携帯電話あるいはインターネットといったバーチャル化した社会のあり方そのものに起因するのであろうが、そのような社会のあり方に先立って、家庭の崩壊、そして家庭の教育力の低下があるのではないかと思われる。

家庭は人類の歴史とともに存続し続けてきたものであろう。そしてそこには男と女の分業があり、子供は、とりわけ幼児期は母親のスキンシップと愛情に包まれて育つ。それが子供の落ち着いた安定した情操を育て、彼らにしっかりとした現実感覚を植えつけるのではないだろうか。これからますますバーチャル化していく社会にあって、子供のリアリティー感覚の育成こそ最重要であろう。

両親が慌しく家事をこなし、慌しく子供を保育所に預け、そして慌しく受け取りに行く、といった日常が、幸せな子供たちを育てるとは到底思われない。慌しさはまさに、文字通り、心を荒らすものである。少々貧しくとも、穏やかな落ち着いた、そして分業によって心にゆとりのある家庭が必要なのではないだろうか。男は男の、女は女の資質を大切に、それぞれの仕事を評価し合い尊重し合う、こういう原点に立つときに初めて健全な子供たちが育っていくのではないだろうか。

- (1) 性同一性障害の人たちを差別なく社会が受け入れ、また彼らの希望に応えるべく国家がしかるべき措置を取るべきだということは論を俟たない。しかしながら、そのことはここでは論じない。



# 家族支援の強化による 家族文化の創造

畠中 宗一 大阪市立大学大学院生活科学研究科教授

## 1. 富裕化社会のパラドックス

わが国は、分業の高度化によって富裕化社会を実現してきた。もちろん、富裕化社会の実現過程においてリストラや失業に随伴したホームレスをはじめとする新たな貧困問題が出現してきていることも事実である。富裕化社会は、一定の生活水準を維持するために働き続けることを前提とする。豊かな生活は、多くの場合、住宅を取得した結果発生するローンの返済や子どもの教育への投資などが組み込まれたものであるため、それらに対処するために働き続けることを余儀なくされる。「人」を大事ににする価値観が中核にあり、それに続いて「もの」、さらに「お金」の順番であったものが、「お金」、「もの」、そして「人」に逆転してきている。われわれは、豊かな生活を維持するために、忙しく働き続けるのである。したがって、経済的に豊かであっても、精神的には余裕のない生活を送ることになる。このことを、「富裕化社会のパラドックス」を呼んでおきたい。精神的に余裕のない生活の内実としては、「煩わしさの回避」であったり、「わかっているけどやれない症候群」であったりする。すなわち、ルーティン化された日常では、一定の家族リズムができあがっている。したがってルーティ

ン化されない出来事の出現は、対処に戸惑い、「煩わしさを回避」しようとする傾向が見られる。また頭ではそうすることが良いことであるとわかっていても、時間的に余裕がなかったりするとそのようにできないということも多い。いわゆる「わかっているけどやれない症候群」である。(畠中宗一、2003：15)

ところで、富裕化社会における家族問題に焦点を当てると、それは、家族機能の外部化に随伴した家族機能の脆弱化および富裕化によって育てられた私事化という2変数の関数として出現してきている。(畠中宗一、2000 a：23；畠中宗一、2000 b：12) 家族問題が貧困問題として認識されていた時代の認識に従えば、富裕化は家族問題の解消を約束するはずであった。しかし、70年代半ば以降の家族問題の沸騰は、それが新しいタイプの家族問題であることを示唆する。すなわち、われわれは、一方で、富裕化社会の実現過程において、獲得された貨幣で外部にあるサービスを買うという形式を一般化させ、その結果、家族機能を脆弱化させてきた。他方で、「富裕化が私事化を育てる」という命題に倣えば、私事化の肥大化という文脈で発生する家族問題が出現している。

一般的に表現すれば、私事化と規範は、反比例の関係にある。すなわち、私事化が肥大

化すれば、規範は希薄化する。現代社会は、私事化が最大化した社会でもある。たとえば、資本主義社会は欲求を煽る社会でもあるが、煽られた欲求を充足するために、売春によって貨幣を獲得し、物欲を充たすという行為は、私事化の肥大化の典型であり、「被害者のない犯罪」とも言われる。(シャー、1981) 不登校も、社会全体に拡散した自由度に対して、管理的色彩の強い学校社会を息苦しい空間として認識し、自分らしく生きたいという思いからの異議申し立て行動という理解も可能である。(畠中宗一、2000 a : 86) また富裕化社会は、個人単位あるいは家族単位で生活が自己完結できるような社会でもある。逆に、貧困社会は、人々が助け合うことをしなければ生き残れない社会であった。このように認識すると、不登校や引きこもりの多発化は、富裕化社会の負の副産物という認識も可能である。(石川義之・信清憲三・畠中宗一・中藤泉、2004 : 20)

## 2. 山根家族論の基本的枠組が示唆すること

山根家族論の特徴は、家族を社会の従属概念としてではなく、家族と社会を独立的にとらえるところにある。家族と社会の独立的関係は、顕在的次元において、「適応」、「不適応」、「過剰適応」の三つのパターンとして、また潜在的次元において、「抵抗」、「否定」、「無抵抗」の三つのパターンとして、それぞれ存在する。家族の社会に対する「適応」は、家族が社会に対する抵抗力としての機能を果たしつつ社会の変動に対応することを意味する。変化に対応することと抵抗することとは矛盾しているが、その弁証法的統合がここで

いう「適応」である。家族の社会に対する「不適応」は家族が社会の変動に対し否定的で適応に失敗することを意味する。(山根常男、1998 : 52 ; 畠中宗一編、2004)

山根家族論における「家族の抵抗力機能」という用語法は、ユニークである。この概念は、二つのとりで機能、すなわち、プライバシーのとりで、人間性のとりでが脅かされるとき、発揮される機能である。したがって、それは、家族が社会に対して主体的な存在であることを意味する理念型でもある。家族の現実的なあり様は、社会変動に対して「不適応」や「過剰適応」することが多い。このことは、家族が、「家族の抵抗力機能」を発揮しにくい状況にあることを意味する。だからこそ、家族支援が必要となる。家族支援は、家族が主体的な存在として抵抗力機能を発揮することができるように行うのである。

もちろん、子ども家族支援はそれなりに行われている。しかし、そのなかみを点検すると、大人の自己実現を支援するという視点や大人が楽をするという視点がないわけではない。保育政策一つをとっても、はこものとしての保育所を増やすという量的拡大が主流であり、大人の自己実現を支援するという命題と安定した保育者との関係を保障するという命題(子どものウェルビーイングへの配慮)を同時に充足するシステムとしてどのようなシステムがベターかという保育の質への問題意識は希薄である。(畠中宗一編、2000) また、大人が長時間労働に勤しむという行為が子どもに長時間保育を強制することになっている。子育ての煩わしさを、親は引き受けなければならないはずであるが、可能な限り楽を

したいと思っている親も少なくない。子育て支援は、親を楽にするためではなく、親が本来の子育てを可能にするように支援すべきである。子育ては、大人が子どもにどのようにかわるかによって大きく違ってくる。大人が子どもの自立を促すように愛情を注げば、子どもはそれなりに育っていく。しかし、大人の自己満足で甘やかせば、子どもの自立が促されることはない。子育ての主体である大人には、親役割を実行する能力の有無が問われているのである。

家族の個人化や多様化が主張されるなかで、山根家族論は、集団としての家族を前提にしているのではないかと、家族の抵抗体機能を発揮する主体が権威的であれば、家族内の暴力が隠蔽されるのではないかと、批判される。しかし、大人が権威的であるかどうかということと、家族の抵抗体機能とは本来独立的なことがらである。山根家族論の主張は、家族が社会に対して独立な存在であることを前提にして、家族の主体性を維持することに主眼がおかれる。抵抗体機能の存在と関係なく、親が権威的であれば暴力が隠蔽される可能性は存在する。

### 3. 家族支援を強化しなければならない理由

富裕化社会の家族問題の特徴を、かつて家族機能の外部化による家族機能の脆弱化および私事化といった二つの変数の関数として認識した。(畠中宗一、2000 a)したがって、この文脈からは、第一に、家族機能が脆弱化しているため家族支援を強化しなければならないという論理が成立する。家族機能の外部化は、貨幣によって外部にあるサービスを購入

するという形式の一般化によって促進される。家族機能の外部化によって、本来持ち合わせていた家族機能が維持できなくなり、家族機能の脆弱化が引き起こされる。第二に、山根家族論に倣えば、家族が社会に対する抵抗体機能を発揮することができるように家族支援を強化するという論理が成立する。この機能は、家族が社会に対して主体性を保持するという視点でもある。今日の家族状況は、山根のいう「適応」とはほど遠く、「不適応」や「過剰適応」を余儀なくされている。家族が家族成員の緊張を解きほぐすような空間として機能するためには、家族がプライバシーのとりで、人間性のとりであることを前提に、家族の主体性によってそのような空間を創出する努力が求められる。これらの責任は、大人にある。また生産性や課題達成型の価値観に対してメンテナンスの重要性を主張することも、家族をそのようなものとして位置付ける家族文化が形成されていることが前提になる。第三に、親役割の実行能力を高めるために家族支援を強化するという論理が成立する。これは、子どもができる親と呼ばれるようになることは確かなことであるが、親になることが即親役割の実行能力までを保障するものではないということである。フロムに倣えば、人を継続的に愛するというのは能力を必要とすること、そしてその能力を維持するためには、学習や研修が必要である。同様に、親役割の実行能力を高めるためには、学習や研修を必要とする。それを可能にするためには、家族支援を強化することが必要である。第四に、人間関係の発達の順序性を保障する家族支援を強化するという論理が成立す

る。人間関係の発達における順序性とは、年長者との関係における信頼、年少者との関係における自制心、同世代との関係における自己と他者の認識といったことがらの順序性を意味するが、これらが一つの順序性として学習されることが子どもの人間関係の発達にとって重要である。(吉川武彦、2001)この順序性が保障されにくい環境が子どもをめぐる問題群の多発化と関連している。したがって、発達の順序性が保障されるように家族支援を強化することが必要となる。

約言すると、家族機能の外部化に伴う家族機能の脆弱化、家族が社会に対して抵抗力機能を発揮できるように(家族の主体性を維持するために)、親役割の実行能力を高めるために、加えて人間関係の発達の順序性を保障するために家族支援が強化されなければならない。

#### 4. 主体的な家族による家族文化の創造

宗像恒次は、生きるための基本的欲求を身体の欲求(生理的欲求)と魂の欲求(心理社会的欲求)に分けている。前者は、個体保存欲求および種族保存欲求からなる。後者は、生命にかかわる脳幹反応を伴う心理社会的欲求とされ慈愛願望欲求(愛されたい欲求:他者に自分の要求を充足されることで満足する欲求)、自己信頼欲求(自分を愛したい欲求:自分で自分の要求を充足することで満足する欲求)、慈愛欲求(人を愛したい欲求:自分が他者の要求を充足することで満足する欲求)からなる。これら三つの愛の栄養素が生きる力をつくるという。また愛し、愛されることで脳血流量の変化にあらわれ、脳幹(間脳や延髄など)を介して身体表現(胸の

ドキドキ、寒気、肩の張り、涙、吐き気、息苦しい、鳥肌など)され、ひとの命を支えているという。

宗像の主張に倣えば、われわれは、愛されたい欲求、自分を愛したい欲求、人を愛したい欲求といったこれら三つの愛の栄養素によって生きる力を獲得していることになる。しかし、現実の家族生活は、西欧型自立モデルに象徴されるように、甘えを排除した自立観が闊歩しているように思われる。愛されたい、自分を愛したい、人を愛したいという欲求は、他者との関係性を前提にするため自己または他者が甘えを受容することがなければ成立しない。子どもの自立が促されるように親が子どもに愛情を注ぐことによって、子どもの情緒は安定する。愛されているという実感が、子どもの自立を促す。大人の都合で、気に入れば受け入れ、気に入らなければ突き放すといった条件付きの愛では、子どもの情緒は不安定にならざるを得ない。子どもや家族の問題が沸騰する今日、子どもの情緒が不安定な状況に置かれるのは、大人の生き方や余裕のなさといったことを子どもが敏感に感じ取り、親から見捨てられることのないように良い子を演じる、という実態を無視することはできない。

したがって、主体的な家族を営むためには、まず大人が精神的な余裕をもって子どもに対処できるような環境を作っていくことであり、政策主体がそれを可能にするような施策を講じることが重要である。加えて、現代社会の急激な変動に「過剰適応」するのではなく、家族成員である大人が社会のあり方を批判的に検討し、主体的な対処を試みることで



ある。たとえば、コンビニで弁当を購入するという行為と食材を購入し弁当を作るという行為があった場合、経済的コストが一定であれば、前者が選択されるのが、いまどきのありようである。しかし、コンビニの弁当が、添加物の使用や、プラスチックの大量使用による環境への負荷が大きく環境問題を引き起こしているという認識などから、そのような選択を拒否し、主体的に食材を求め弁当を作る親が存在することも事実である。子どもにきちんとした食事を準備することは、大人の主体的な選択から生まれているという意味で、それは一つの家族文化である。社会変動と家族のありようはたえずせめぎ合う関係に置かれる。そのようなとき、利便性・効率性・快適性といった価値だけが判断の基準になれば、結果として環境に負荷をかけ、自らの身体も破壊されていくという状況に置かれる。利便性・効率性・快適性が追求される社会にあって、そのことが資源を濫費し環境に負荷をかけ、最終的には自らの身体さえも破壊されていくという状況は、いったい何を意味していることになろうか。これは富裕化のパラドックスと言い換えてもよいが、これらの価値が追求されることによって、われわれの社会は人間の崩壊に近づいていることにもなる。

われわれのいまの生き方を根本的に見直さない限り、人類の未来はないように思われる。山根家族論で言われる家族の抵抗力機能は、集団としての家族を前提にしているとか権威主義的な親のもとでは家族成員が抑圧されるといった理由からでなく、現代家族をより広い人類史のなかで読み解けば、もっと生産的な解釈を引き出すこともできるのではない

か。山根常男の認識もそのような文脈を背景に主張されているようにも理解できる。利便性・効率性・快適性を追求する社会の背後で、家族は「過剰適応」や「不適応」を余儀なくされ、本来の「適応」ができない状況で、地球環境に負荷がかかり、同時に人類も危うい状況に追い込まれていることを認識すると、家族が本来の「適応」を可能にするために、家族支援の強化は喫緊の課題である。また家族支援の強化を通して、家族文化が創造されていけば人類の将来を幾分明るく描くことができるかもしれない。

<参考文献>

- フロム、E (懸田克窮訳、1959『愛するということ』紀伊国屋書店)
- 畠中宗一編 (2004)『抵抗力としての家族：主体的な家族を志向する人々のために』(『現代のエスプリ』442) 至文堂
- 畠中宗一 (2003)『家族支援論：なぜ家族は支援を必要とするのか』世界思想社
- 畠中宗一編 (2000)『家庭的保育のすすめ』(『現代のエスプリ』401) 至文社
- 畠中宗一 (2000a)『子ども家族支援の社会学』世界思想社
- 畠中宗一 (2000b)『家族臨床の社会学』世界思想社
- 石川義之・信清憲三・畠中宗一・中藤泉 (2004)「座談会：家族の崩壊・教育の崩壊にどう対応すべきか」『ESP』9月号
- 吉川武彦 (2001)『「引きこもり」を考える：子育て論の視点から』日本放送出版協会
- 宗像恒次 (2004)「大学生の輝くキャンパス—メンタルスキルトレーニングの時代」第10回日本精神保健学会学術大会基調講演
- シャー、E.M (畠中宗一・畠中郁子訳、1981)『被害者のない犯罪：墮胎・同性愛・麻薬の社会学』新泉社
- 山根常男 (1998)『家族と社会』家政教育社



## 家庭の教育力の低下に 学校はどう対応するか

原 聡介 目白大学教授

### 学校頼みの生活指導

家庭の教育力が低下してきたと言われている。家庭で生活指導ができなくなった。うちの子は挨拶一つできない。先生、指導してください、と親が言ってくる。それはあなたの仕事ではないか、と先生は言いたい、ぐっところえて、そうですね、がんばりましょうということになる。それは学校の仕事ではないと言い切れるなら気は楽だけどそれもできないからだ。勉強は学校、しつけは家庭、と心では思っている、放っておけない現実問題をそれで割り切ることは難しい。

家庭の教育力の低下という場合、虐待だとか、放任だとか、いわゆる問題家庭の場合のことだけではない。どうやら一般的に、親が指導できなくなっている。子の自主性を尊重する形をとりながら、実際のところは、一言で言えば、叱れなくなっている。叱るということは緊張関係をもたらすから、できるだけそんなことにならないで、平和な親子でいたい、やさしい関係でいたいということのようである。

今、若い世代に感じるのは、平和でやさしい感情だ。人と人が緊張関係に入るのをとても嫌う。たとえば授業中に私語をきつく叱るととてもいやな気分になって、授業に身が入

らないという。本音のところでは私語をやめてほしいと思っけていても、それを自分が注意することはむろん、教師が注意することにも不快感があるようだ。

一部に暴力的な親子関係があるいっぽうで、計算はできないが、多くの家庭では緊張を避ける、この平和な関係が広がっているように思われる。若い人たちを見ていると、おそらくこの状況は今後一層進んでいくのだろうと思う。それはそれでいいとも言えるが、しかし、学生の身分を離れてやがて親ともなると何とかしなければならぬから、そこで学校に頼むしかない。勉強は家庭教師や塾の方途があるから、いやそちらのほうが進学には頼りがいがあるから、むしろ家庭にひきとってもよいが、学校でしつけをよろしくという、一種の逆転がおきてくるかもしれない。実際そうになっているとも言われている。

### 歴史の中で

さて、家庭の教育力の低下は、今に始まったことではない。大きな歴史で言えば、中世末期、教育論はもっぱら家政論の領域のものであった。さらに、個人を中心として構成される近代社会では、一人ひとりの生活のあり方は家庭の問題であり、近代革命、たとえばフランス革命において試みられた国民教育制

度の組織は親のもつ教育力を前提にして組み立てられた。その場合の家庭とは市民革命を支えた中産階級のそれであったとは言えるけれども、家族を基礎単位とする近代社会の構成原理がそこにはあった。

ところが、やがてやってきた産業革命の時期になるとそんなことは言っていられない。農業の場では、種まきや作物の世話、あるいは灌漑、さらには収穫と祭りなど、家族内の、また共同体内の共同作業をしながら、そのこと自体が社会関係を養う教育であったが、工場労働では事情が一変する。仕事のし方は親が子に教えるのではなく、親自身が工場で教えられる。また、親の賃金だけでは生計が成り立たず、子どもも働きに出るようになり、5、6歳の幼少労働が多く出現した。9歳以下の雇用や14時間以上の労働を禁止するなどの工場法が作られたが、実効性に乏しく何度も作り直されなければならなかった。この労働環境の下では、教える内容がなくなっただけでなく、教える場も時間もなくなった。こうして、家庭の教育力は急激に低下し、社会のモラルも極度に退廃した。

この時期に生きたペスタロッチは、こういった時でもなお、居間の教育が基本であることを主張したが、それが失われている状況の中で、学校や孤児院によってそれに代わることを試み、そこに生涯を費やしたことはよく知られていよう。彼は学校が家庭の補完物であり、教師である自らを父になぞらえ、生活教育の原理を打ち立てた。ペスタロッチの業績は大きな影響を及ぼし、その後の初等教育の展開に力を与え、実践の大きなよりどころとなったのである。要するに、小学校は生活

指導の場として発展したのである。

産業革命の時期を過ぎて、家族や社会は一応の安定を回復するが、ところが19世紀末に始まる新教育運動期に入ると、家庭の教育力は独自の道を取り戻すというより、むしろいっそう学校の中に入り込む形になった。子どもや子どもの生活を全体としてとらえるべきであり（whole child）、それを学校へ受け入れるというのが当時の教育論の基調であった。デューイをはじめ、子どもの学習を遊ぶ場面や勉強の場面で分割せず、全体のつながりの中におくべきだという主張があり、そう言われればそれもそうかと思ううち、教育のすべてを学校に囲い込む、あるいは背負い込んで自ら苦しむというパラドクスを生むことになった。これは、教育学が陥った一種の論理的陥穽であったようにも思う。

19世紀は、教育学の本体が家庭教育学から学校教育学へ転換する時代であるが、新教育はそのひとつの帰着であった。その後、全人教育だとか、全面発達だとかの言葉に導かれながら、学校は教育の全体を受け入れ、新しい展開を遂げるが、同時に自ら呻吟せざるを得ない事態を作り出したともいえる。今日、家庭と学校との役割分担が本来であると主張することは考え方として間違っていないとしても、それを歴史的事実として説明することはできない。

さらに専門化社会が進む中で問題は一層深刻になっている。学校が教育の専門機関としてとらえられ、学校に教育がますます集中してきた。昨今、医療や法律だけでなく、環境、介護、食、旅行、レジャーにいたるまで専門化され、それはそれで便利な世の中になった。

世の中は多くの情報にあふれているけれど、一個人として知っておくべきこと、処理できることはわずかでよい。問題があれば、専門家に任せればよいのである。しばらく前までは、少なくとも大学を出たなら市民生活に関わる基本的な事柄には通じておくべきだとして、人文、社会、自然の3領域の教養科目の必修が課せられていたが、それは無駄だととして、ここ20年ばかりの間に急速に解体され、見る影もなくなった。こうして、社会制度の各領域が専門化され、その便利なシステムは今後いっそう進行するだろう。そして、その中で、教育だけが別であることはできない。教育もまたそのように受け取られ、何事も学校にということになったとしても不思議ではない。そこにはたしかに教育の主体についての思い違いがあるだろうが、それを言い立ててみたところで効果は期待できそうにない。

家庭の教育力の低下が、こうして学校の発達と相互に影響し合いながら進んできたことを認識しておくべきだろう。こういった歴史的状况を別にして、単に家庭の教育力の低下を嘆いてみても、それは嘆きに終わるだけである。学校は、生活指導の任務を改めて覚悟し、その態勢を整えるため腹をくくらなければならぬ。

### 個人中心的社会の進行の中で

家庭の教育力についてのもうひとつの難点は、日本人のやさしさにあるともいえる。若い人たちのやさしさのことを上に述べたが、実はこれは日本人の根っこにある問題ともいえる。子どもは悪だと言ってそれをたたき直すところに教育の意味をみてきたキリスト教

の世界に対して、子どもは金銀に勝る宝だと歌った万葉集の山上憶良や、能狂言の教育を子どもの「心のままにせさすべし」というところから始めるべきだとした世阿弥などを引くまでもなく、いったいに日本人は子どもをやさしく扱ってきた。

むろん、そのやさしさの中でこの社会は維持されてきたのだから、それぞれの社会のことであり、それ自体には何の問題もない。かつて日本には罪の文化がないと言われ、子育てにも厳しさがなかったことが何か弱点のように思われ、西欧型の民主主義が育たない理由とされたりしたが、かならずしもそのように考えることはない。西洋世界との比較によるよしあしは別のことであり、実際、個人化が進み、過度の訴訟社会になった国からは、日本のような国もよいかという見方が出てくるし、それにも理由のあることだろう。

だが、社会のあり方としてどちらに価値があるかということとは別に、今日本にあって、事実として個人中心社会が急速に進んでいく状況がある。それに対応する道徳のあり方が整う必要があっても、それがなかなか間に合わなくなっている。個人中心社会に対応する道徳力の育成をどうするかという課題は、古くからあるとも言えるが、今それが改めて厳しく突きつけられているのではないか。

親の役割には、子をやさしく受け入れ、包摂するはたらきがあることはたしかであり、大事なことだ。親の絶対条件だともいえる。だが、それとともに、いっぼうでは子をひとり立ちさせていく働きがある。今、家庭の教育力の低下というのは、とくにこのことのことだろう。ひとり立ちしていく主体の訓練を

どうするか。とりわけ、個人中心社会の進展の中でこのことが教育の重要な課題になる。

その中で気になるのは、「個性教育」の流行のことだ。個性教育ときけば、この新しい個人を育てる教育のことかと思われるが、どうもそれがおぼつかない。というのは、個性がもっぱら他者との違いのことだということになっているからである。個性 (individuality) が社会を構成するこれ以上分割し得ない基礎単位概念として定着した時 (17, 8世紀頃)、それは社会の信頼できる構成主体が担うものであった。それが19世紀の競争社会化の中で次第に差異性の意味に移り始め、20世紀以降すっかり姿を変えてしまったが、主体性概念に戻るべきときがきているように思う。

あの人は個性的だというとき、普通には、あの人は変わっているなあという意味をもつ。社会的責任はさして取れそうになくても、変わっているだけをもってそれを個性と呼んで尊重し、受け入れていく社会的システムを作っていくことは大事であろう。だが、そのような個性にただちに教育的価値があるというわけではあるまい。また、いわゆる「個性教育」がそれを日指すものであるとは思わないが、差異性に価値の中心をおくことの意味をはっきりさせなければならない。それが今、不明確なままだ。人間は誰でもヒトという種の中で明確な共通性を持っており、それに比べて個体間の差異は微々たるものだ。競争社会の中でその差異の見かけが拡大されてきたが、社会を構成する主体としての個人が育たないで、単に他と違っているというだけの「個性」が分散的孤立的に広がって行くので

はずい。

そういった原理的な問題に加えて、子どもの個性に合わせるという名目で、その場限りの興味に応ずる授業の傾向が出てきていることに注意を向ける必要がある。仮にそれを個性の伸長のためと言うとしても、それは基礎基本の学習を前提に行われるはずのものであり、そのところが崩れてはならない。基礎基本の授業が難しくなっている子どもたちの状況があるならば、それに打ち勝つだけの教材研究で応えるしかないのだけれど、もしも個性教育の名の下に、安易に流れている現実があるのなら、家庭の教育力どころか、むしろ学校の教育力の低下をこそ問わなければならない。むろん個性は大事であり、強い確かな個性がほしい。しかし、それはしっかりした基礎基本に支えられていそうなるはずのものである。授業の後で雲散霧消してしまうような個性では困る。この厳しい世の中ですぐつぶされてしまう、吹けば飛ぶような脆弱な個性では困る。

さらに気になることは、差異性ばかりに気をとられ、子どもたちを社会的選別に追いつてはいけないということだ。今、子どもたちは評価と言う名の選別装置によって追い込まれ、落ち着きをなくし、主体の形成どころではなくなっているように見える。教育評価は教育目標の達成をより容易にするために必要なことであるが、それはいつも社会的選別の道具になる危険を抱えている。家庭の教育力の低下に不満を漏らしながら、いっぼうでそれに拍車をかけることをしてはならない。

### 第3の教育力への期待

教育は学校で完結することはでないし、またそうすべきでもない。だから、教師の力量形成とともに親への呼びかけは、むろん必要である。しかし、それは、単に提携と言ったり、家庭と手をつなぐとか、連絡を密にすると言うことではない。学校と家庭が補い合う関係にあることはたしかであるが、それが提携と言ったりさらに別の危険があることを知らなければならない。それは、家庭が学校の下請けになり、学校化社会の進行に役立つだけになりかねないからだ。学校への教育集中を作り直し、学校中心のシステムをこえる教育力を創出するには、学校と家庭のほかに、その教育力を補う、もうひとつの第3の力が必要になっている。

歴史が共同体中心から個人中心の世界へ移ってきたとき、それに伴って、個人の極小化と社会の極大化がもたらされた。この両極の間には、かつての共同体にあったような相互に向き合う関係がない。極大化した社会としての国家は、いちいちの個人には振り向かない。そこで、国家が振り向かないのなら、こちらも振り向かないことになる。われ一人どうなろうと、社会には関係ないし、責任もない。こうして、個人の行動を社会が支える現実がなくなり、いわゆるアノミー（規範のない）状態になる。今、子どもの主体化を支える力として、家庭と学校のほかに、この振り向く社会、個人と国家の間にある中間社会が求められている。

すでに20世紀への転換期に、アノミー論を定式化し、中間社会の必要を説いたデュル

ケムは職場集団に期待をしたが、今それを一般化して考えることは難しかろう。少なくともそれは家庭の教育力を補う機能を持つことから遠いだろう。その点では、多様な展開を示しつつある地域社会にやはり期待を寄せてもよいかと思う。

さらに、最近盛んになってきたNPOやNGOといった民間活動がどうなっていくか、新しい期待を持ちたいし、期待しなければならない。それがただちに家庭の教育力の復権に役立つかどうかと言うよりも、そのような活動に参加する人々が多く現れ始めたことにひとつの希望をつなげたい。

直接的な教育機能ということを考えれば、このような時PTAへの期待が出てきてもよいが、どうもそれははずれのようだ。学校後援会ではなく、独自に教育を考え、それを学校教育に反映させていく親と教師の学習集団であったはずが、いつまでたってもなかなかそういかない。だが、ここにも希望をたってはなるまい。



## 子育てを根源から見直そう —家庭教育の復権のために—

平山 攝 かびら幼稚園 園長

### はじめに

家庭教育力の崩壊は、社会構造の変化がもたらしたものであり、一朝一夕に回復することは難しい。家庭教育力の崩壊した家庭に育った子が親になり、また、その子が親となっている時代なので、復権は絶望的にも思える。しかし、この厳しい現実を見据え、長期展望に立って取り組まなければならない。決め手はやはり教育にあると思う。

育ちそこねた子どもたちが年々数を増していった結果、「幼児化」が「深くしずかに広がって」おり、「育ちそこねた自我をもつ人間は、あそこにも、ここにもいる」と警告を発するのは、「わいふ」編集長だった田中喜美子氏である。氏は著書「子育て大崩落 子どもは母親から引きはがせ」(毎日新聞社・2004年9月)の中で、日本の伝統的な「幼い子には甘い」子育てが諸悪の根源であり、今の専業主婦による母子密着の甘やかし育児を追放せよと吠えている。過激な題名にしては、日本の子育ての現状を的確に捉え、非常によくまとめているという印象を受けるが、その解決策が乳幼児を母親から引きはがして保育所に預ければよいというのは、余りにも非現実的な提案である。百歩譲って、保育所に預ければ問題が解決すると仮定したとしても、天文学的な財源が必要であり、夢物語にしかない。しかし、そもそも保育所に子育てを

丸投げして、子どもがまともに育つものだろうか。

三歳以上の子どもでさえも心身の発達状況から見て、幼稚園が行っているように原則4時間程度の集団生活が適当と云われているのに、三歳未満児を8時間以上も集団生活に入れてしまうというのは極めて不自然であり、子どもにとっては実に不幸なことだ。たまたま親の都合で、子どもを心ならずも預けざるを得ないのが保育所であり、本来、親にとっては必要悪、乳幼児にとっては迷惑この上もない施設であるということを再確認してもらわなければ困る。だから、出来るだけ、保育所のお世話にならずに済むような社会の仕組みを作るということが、最優先されるべきことである。にも拘らず、国を挙げて保育所の増設を図り、保育所に乳幼児を託す方策ばかりが実行されているのは、どう考えてもおかしい。社会にとってかけがえのない仕事、代役のきかない仕事をしている母親を支援する福祉施設としての保育所は、確かに必要である。しかし、そういう人は限られている筈で、大部分の母親は経済的な面さえ解決すれば、保育所を利用しなくても子育てが出来るはずである。一旦、保育所という、親にとっては便利で有難い仕組みが定着してしまうと、それを善用する人には、法外に少ない自己負担で子どもの面倒を見てもらえるということになるが、必ず便乗して悪用する人が出てくる。

現に法外に少ない自己負担でさえも払おうとしない利用者が全体の何割もいるというのではない。本当に経済的に苦しくて払えないというのならまだ分かるが、そうではなくただ乗りをしてしまおうという不屈きな連中が大部分の筈だ。本当に苦しければ生活保護等の対象になっているはずだから。わが子の子育ての大きな部分をプロに託しておきながら、コストから見ればごく僅かな負担さえも知らん顔をして払わないで済まそうという精神の人が親である子どもが、まともに育つと思う人がいたら顔が見たい。こういう子どもが続々と育っていくのだから、何が起きてもおかしくないのは当然なことではないか。いま、国を挙げて行っている子育て政策は、日本民族を根本から墮落させ、亡国の道を歩ませるために、莫大な予算を投じて墓掘りをしているのだとしか思えない。

ただ、三歳未満の乳幼児のしつけ・育て方に問題が多いようなので、そのための子育て支援を幼稚園が担えばよい。現在は、三歳未満の乳幼児は保育所しか行くところがないと思われているが、保育所での受け入れは現状でも無理であり、これ以上保育所の数を増やすことは財政的にも不可能である。そのため最近では、待機児童解消と称して、私立幼稚園にも保育所を作らせようとする企みが進行中で、埼玉県では学校法人立幼稚園が敷地内に保育所を開設するための補助金を出して積極的に奨励している。そんな金があるのだったら、幼稚園が三歳未満児の子育てを支援できるような補助金を出したほうが、少ない費用で実効性のある子育て支援が出来る。現にかびら幼稚園では、赤ちゃん連れの親子から園に来て、仲間作り（親子共）や子育ての方法を学んだり、悩みを話し合う教室を始めてい

る。問題は、それに要する人件費をどのように捻出するかであり、それさえ目途がつけば多くの園で実行可能なことである。要は、子どもの育ちにとって何が必要で何が大切なかを根本から見直し、国の子育ての大方針を確立することから始めるべきだろう。

### 亡国への道

文部科学省も学力の低下を認めざるを得ないところまで来たが、日本の社会全体のレベル低下は著しく、このままでは、日本は亡国に陥ることは必至である。特に犯罪の低年齢化、社会規範の喪失、自己中心主義の蔓延等、この国は芯の部分から腐り始めている。今は、政治・経済・社会の制度等の外枠が一見、大丈夫そうに見えるので何とかもっているが、早晚、錆びて崩れて行くであろう。この原因は、実は子育ての根本から誤っていることのように思われる。子どもを産み育てるということは、生命を親の世代から子の世代へと受け継いでいくための生物にとって一番大事な仕事であり、人間以外の生物の一生はそのためだけにあるといっても好いぐらいである。然るに、今の日本では、そのことが個人の恣意によって自由勝手に扱ってよいこととされ、社会にとって最も大切な協同事業であるべき子育てが、軽視され、無視されている。社会に生きる全ての人、自分の後から生まれ育っていく子どもたちを、どうすれば反社会的なお荷物的存在にならないように導くかという大きな命題を背負って生きていることを忘れている。だから、子育てのためにならないことや、子どもの教育にならないことも、平気で言ったりやったり見せたりして、恬として恥じない。

かつて、日本人は神仏を尊び、何事にも謙



虚で慎ましく、礼節を重んじ争いを好まぬ民族であった。それが、たった一回、戦争に負けたからといって、過去の伝統・文化・生活習慣を含め、良いことも悪いことも全て切り捨てようとしたところに一番の原因があり、無理があった。その付けが今回りつつあるということだろう。

### 子どもの「からだ」の異変

その付けの第一が子どもの体そのものに現れている。山梨大学教育人間科学部助教授の中村和彦氏は、著書「子どものからだ危ない！」(日本標準・2004年8月)の中で心の要素も含んだ子どもの「体力」に大きな異変が起きていると力説している。既に文部科学省の「体力・運動能力調査」においても、体格は、身長・体重共に親の代を上回っているにも拘らず、現在の子どもの方の体力が低下している事実を公表している。しかも体力低下は、既に幼児期から始まっており、歩く・走るといった基礎的な運動能力や体をコントロールする力が大幅に低下しているとのことである。自分の身のかばい方や転び方を知らないため、骨も弱くなっているせいか、昔なら考えられないようなケースで簡単に骨折してしまったり、頭や顔に怪我をしてしまったりするという。こういう子が増えている反面、特定のスポーツに偏り、体を酷使してスポーツ障害を起こしてしまう子もいる。子どもたちが運動不足か、運動過多かという二極に分かれているという。

子どもは本来、体を動かすことが好きで、散々走り回った挙句エネルギーが切れるとバタッと倒れてそのまま眠ってしまうのも珍しくなかったものだが、最近では、体を動かしながらいない子どもが増えている。山梨大学の調

査によれば、この20年間で小学生の歩数が大幅に落ち込んでおり、スポーツクラブ等に所属し、平均の二倍以上の運動量の子どもがいる反面、一日の運動量がおにぎり一個分の消費量という子もいるというように、極端な二極分裂状態にある。外遊びを好まず、室内でテレビゲーム等に向かう子どもが増えている。又、「疲れた」が子どもの口癖になっており、登校時や週初めが疲れのピークで、体を動かすほどに疲れが取れていき、下校時・週末の金曜日に一番元気になる小学生が多いという。いかに家庭で体を使わず怠惰な生活を送っているかという証拠であろう。更に、成人病と思われていた生活習慣病が、子どもから始まり、5人に1人がその予備軍と見られるまでに至っている。肥満傾向児は10人に1人いる反面、太ることを恐れてダイエットに走り、成長発達に必要な栄養を摂取していない子どもも珍しくないという。

その上、小学1年生の半分が何らかのアレルギー疾患を持ち、平熱が36度以下という低体温の子が20パーセント以上いるといわれ、明らかに乳幼児期の育て方に問題があることを示唆している。体温調節・病気への免疫力・ストレスへの抵抗力等、外からの刺激に対して体を一定に保つ防衛体力に赤信号が灯っている。不登校・落ち着きがない・キレやすい子どもの問題も、この防衛体力と深く関わっているのではないかと中村氏は推量している。

### 描画テスト

一方、小学生に対する描画テストの調査を通して、「これからは中学生どころか、小学生による事件も起こります」と予言していた、臨床心理士の三沢直子氏は、著書「子どもた

ちはなぜ、9歳で成長が止まるのか」(実業の日本社・2004年9月)の中で、現代の子どもたちには成長発達に欠かせない三つの間(仲間・空間・時間)が失われていることを指摘している。

子どもたちはテレビゲームを筆頭とするテレビ・ビデオ・ゲームなどの機械漬けの生活にはまり込み、現実と非現実の境界が曖昧になっているのではないかと、三沢氏は案じている。森昭雄著の「ゲーム脳の恐怖」(生活人新書 NHK出版・2002)によれば、テレビゲームを週4日以上、1日2～3時間、10年以上続けると、痴呆老人とほとんど同じように、脳の前頭前野が全く機能しない状態になっていることが判明したという。そのため「ゲーム脳人間タイプ」の人は、物忘れ、物覚えの悪さ、集中力の欠如などの自覚症状があり、その8割が「よくキレやすい」と認めたという。

ゲーム漬けの生活が子どもの現実感覚を希薄にし、描画の「統合性」にも影響を及ぼしている、と三沢氏は指摘する。通常、小学3年生ぐらいまでは「思ったままに描く」「観念画」が多く、4年生ぐらいになると「見たままを描く」「写実画」に移行するものだが、それには、例えば人と家と木という3つの課題をまとめて1枚の絵にまとめるための「統合性」の発達が必要である。「観念画」の状態が4年生以上も、大学生になっても続いているということは、単に描画自体の問題ではなく、心の発達が見られないということになる。そして、「統合性」が9歳・小学3年生のレベルで発達停止しているという描画テストの結果は、前頭前野の機能が9歳レベルで止まっていることが考えられ、これが「キレる子」の増加や少年犯罪の頻発につながって

いるという。

三沢氏によれば、1970年代半ばから「家庭内暴力」が目立つようになり、80年代半ばからは、IQは高いがEQが育っていない新入社員が出現したという。90年代に入ってから、家庭における子育て力の低下が非常に目立ってくる。いわゆる「新人類」は60年代前半に生まれた人を指し、その世代が思春期になったとき、社会人になったとき、親になったときなどの局面に、今までにはなかった問題が発生していた、と述べている。

三沢氏は、「核家族・夫婦分業・専業主婦による子育てというのは、この40年から50年の間に広がった、特殊と言ってもいい形」だと断じている。60年代以降の家庭は、常に父親不在のままで成立してきたと言い、ここに大きな問題があったとしている。「現代の母親のほとんどが、出産までは男性と同じように働いているために、地域やご近所とのつながりはほとんどない」が、出産後は子どもを連れ歩ける範囲内で、新たな人間関係を作らなければならない。しかし「地域で新たな人間関係を作るのは大変なこと」だから、「他人との接触が苦手な母親は、ほとんど外界との交流がないまま、“母子カプセル状態”の中に親子で引きこもって暮らすことになる。」「親子での引きこもりの傾向は、特に新人類の人たちが親になった90年代になって顕著になった」。新人類は、個人的・私的な生活を重視するので、「子どもを買い物には連れて行くが、公園など人と触れ合う場は避ける」。その結果、母親の人間関係が広がらないため、子どもも他人と交わることが出来ず、心を育てる機会に恵まれない。何故なら、「子どもの心は、多くの人と交わることでしか育たない。特に子ども同士の交わりは必要

不可欠である」からだ。この“母子カプセル状態”が、様々な問題を生んでおり、「たとえば、人との違いを単なる“違い”として認められず、“間違い”だとする人が増えた」。つまり自分と違う言動をする人を容認できない、「他者否定型」の人が増えているという。これは家庭での教育力を低下させる大きな原因となり、母親が構造的に子どもに対する独裁者になる恐れがあると氏は言う。

90年代に核家族・夫婦分業・母子カプセル状態の中で自ら育てて来た人たちが親になり、親たちの両極化が目立ち始める。掃除・料理から教育・しつけに至るまで、両極端な人が多くなり、“常識”とか“コモン・センス”（共通感覚）というものがなくなっているという指摘は肯ける。こういう親に育てられた子どもたちが小学校に入学するのだから、両極化した子どもが増えるのは当然だろう。しかも他人との関わりが希薄で閉鎖的な家庭ほど、抱えている問題が純粋培養されて、世代を重ねるごとに拡大再生産されるという指摘は、正に現在、幼稚園の現場で我々が直面し悩んでいる事例そのものといってよい。

### 哺乳動物としての人間

現代の日本人が悩まされている問題の根底に、人々の間に広まった生活習慣の変化そのものがある、と主張するのは、医師で日本免疫治療研究会会長の西原克成氏である。氏は著書「究極の免疫力」（講談社インターナショナル：2004年7月）の中で、現代医学の主流が、「臓器別医学」になり、人間をまるごと捉える統合的な視点が失われたために、対症療法ばかりが行われ、人間の病気を治し、健康を育むという本来の目的が見失われていると鋭く指摘し、口呼吸・冷たいもの中毒・睡眠

（休息）不足が、大人の免疫病の急増、若者たちの元気のなさを生んでいると述べる。小中学生の不登校や低体温、睡眠障害や学力の低下などの問題は、厚生省の推奨する早期離乳等の育児法の間違いに起因すると力説している。

人間は四足歩行を直立歩行に切り替えたことにより、両手を自由に使える能力が発達し、道具を工夫したり発明したりして上手に使いこなすように習熟する過程で頭脳が飛躍的に発達し、言語を発明して口でしゃべることが出来るように進化した。その結果、益々頭脳の発達が高度化し、文化や文明を大いに発展させることが出来た、といわれているが、その反面、動物本来の生存機能を損なうような機能や習慣も身につけてしまう結果となった、と西原氏は言う。

言葉をしゃべり始めたために、気管と鼻腔とのつながりが離れるようになり、気管と鼻腔とのつながりが常時保たれている他の哺乳動物とは違い、口呼吸が出来るようになってしまったという。口で呼吸すると、黴菌が喉の扁桃からとめどなく取り込まれ、唾液等が溜れて体に悪影響が出るばかりか、歯並びが悪く、猫背の子が出来てしまう。

また、家庭での冷蔵庫や冷凍庫の普及により、常時冷たいものを食する悪い習慣が付き、冷たいもの中毒に陥っているというのが、西原氏の第二の指摘であり、冷たいものの飲食により腸を冷やしてしまうと、体内の循環系を傷め、体中の細胞内での細胞呼吸、ミトコンドリアの働きも悪くなって、原因不明とされる難病・免疫病をも引き起こす結果を生むと警告している。

更に、夜型生活の流行や短時間睡眠の勧めなどにより、睡眠不足が常態になっている現

代の生活パターンの結果、動物にとっては不自然な直立生活を選んだ人類にはつきものの重力から受けるストレスを、解消する時間が不足している。最低8時間は横になって眠る、あるいは横になる骨休みが、健康を保つ上でどうしても必要だと氏は力説する。また、睡眠中には細胞のリモデリング（新陳代謝）を初め、体をリフレッシュするために欠かせない様々な働きが体内で行われており、重力の影響をゼロにする横になっての睡眠が欠かせないという。座ったままいくら眠っても疲れが取れないから、その重要性は容易に理解できよう。

氏は、戦後アメリカから取り入れた早期離乳による育児法が、やはり哺乳動物の一員である人間にとって不自然であり、害をもたらすと主張している。現在、厚生労働省が出している母子手帳とそれに基づく子育てのガイドラインに大きな誤りがあり、これを「日本式育児の六つの誤り」と命名している。この誤りが、日本の子育てを誤らせ、弱い子どもたち、駄目な子どもたちをつくり出していると厳しく批判している。

その第一で最大の誤りは、早期離乳の奨励である。これはスポック博士流の「早い時期からたんぱく質を与えないと脳の発達が悪くなる」という思い込みで、これは完全な間違いだという。何故なら、五か月の赤ちゃんに必要なのは必須アミノ酸と必須脂肪酸であり、タンパク質ではないからだ。タンパク質を含んだ離乳食を食べた五か月の赤ちゃんの体の中では、どんどん抗体が出来てしまう。タンパク質はうまく消化できないので腸の細菌叢が変化して緑便になり、そうした子どもはたいてい低体温になってしまう。お腹が苦しいので、寝返りが出来る頃からうつぶせ寝

になり、鼻がうっ血して鼻閉になり、口呼吸になる。こうなれば、手足が冷たくなり、腸が壊れて腸内細菌のバランスが崩れ、乳幼児アトピー性皮膚炎が始まる。これで、幼稚園でもなぜ入園児にアトピー性の子がこんなに多いのか納得できるというものだ。

特に二歳半までに絶対与えてはならない食品として、生のハチミツ、生エビや生のホタテ、カニ、刺身、ピーナツバター、そば、うどんなどを西原氏は挙げている。これらのタンパク質は、ひどい場合は少年少女期になってアナフィラキシーを起こして、ショックで子どもが死んでしまうことさえあるという。勿論アトピーの原因にもなると氏は確信している。更に癲癇や自閉症さえも離乳食の誤りに起因するのではないかという。

生後まもなく、母乳を飲んでいるだけなのにアトピーになる赤ちゃんがいるが、これは母親が妊娠中に冷たいものやアイスクリームを食べたためだという。妊婦が腸を冷やすと、抗原性のあるタンパク質や黴菌だらけになった血液で胎児がつくられてしまう。授乳中の母親が冷たいものを食べても黴菌だらけの母乳になってしまう。その場合は42度の適正な温度に温めた乳児用ミルクに切り替えれば直るという。

二歳未満の子に離乳食を与えてはならないと西原氏は警告する。抗原性の少ないカボチャやお米も駄目だという。皮膚が赤くなったりするが、この時期の赤ちゃんの腸が乳児用ミルクしか受けつけないからだ。しかし、腸のしくみを含めて、赤ちゃんの身体特性をきちんと把握しさえすれば、小ぶりでピカピカでいつもニコニコしている頭のよい子が育つという。氏は「離乳を早く始めるメリットはまったくありません。低体温でぼんやりした

ウドの大木のような子や、小さくて一生涯便秘や下痢で苦しむ人になるだけです。二歳半まで母乳で育てましょう」と指導しているという。そうすると赤ちゃんはほとんど病気をしないそうだ。

正しい育児をしていれば、赤ちゃんはいつも機嫌がよい。正しい育児とは、まず赤ちゃんを冷やさないことが大切で、きちんと温かくしてあげることだ。次に、母乳で育てるのが一番よいが、母乳の出が悪い人や母親自身に低体温やはっきりしない感染症があり、母乳の質に問題がある場合は、42度の赤ちゃん用ミルクで育てる。更に、赤ちゃんの呼吸のしつけが大切で、口呼吸が習慣にならないようおしゃぶりを与えて、吸ってつ運動をさせるとよい。また、必ず両肩をつけて上向きで寝る習慣をつける。あとはゆりかごをよく使ってゆすることと、ハイハイとおんぶとだっこを十分にすることである。そして早く立たせて早期に歩かせないことも大切、歩けるようになってもベビーカーを使うことだという。基本的に以上のことを守ってれば、手のかからない子どもがすくすくと育ち、病気もしないそうである。

### 家庭教育力復権のために

家庭の教育力の復権には、まず子どもを正しく健康に育てることから始めるべきであろう。正しい育児をすれば、子どもは手のかからない精神の安定した丈夫な子に育つ。これで今、母親が悩んでいる子育ての問題はほとんど解決してしまうだろう。その上で、家庭に父親を取り戻し、父親の役割と母親の役割をそれぞれの特性に応じて正常に発揮さえすれば、元気でたくましく意欲溢れた子ども本来の姿が見られるようになる筈である。それ

には、社会全体が子育ての大切さに目覚め、社会を構成する全ての人の子育てに関心をもち、全員で子育てに協力するという気運をかもし出すことが必要だろう。国の政策もその方向で実行されなければならないのは言うまでもない。

さし当って、直ぐに実施できることは、幼稚園に対して乳幼児からの子育て支援が出来るように、財政支援を行うことである。それと並行して、保育所に掛かる予算を減じて、家庭で乳幼児の子育てをする母親に子育て支援の補助金を出すことだ。学校の児童生徒にも、乳幼児の世話をしたり、面倒を見て一緒に遊ぶ機会を設けるべきだろう。

地域のお年寄りにも一役買ってもらった方がよい。社会の色々な場面で、乳幼児や子どもが注目され、利益一辺倒の企業も子育てのためには少し配慮して、子育てに害になることだけは極力謹んでくれるようになれば、社会が明るくなり、日本再生の兆しも見えてくるのではないだろうか。



# 家庭における「こころの教育」とポピーの役割

荒川 進 全日本家庭教育研究会 教育対話主事

## 1. 子どもの姿の一断面

子どもの「こころの育ち」が危ないと思われる事件や行動が目につく。それは、子ども自身が美しく、気持ちよく生きることの難しさを示すものだろう。

今朝の通勤時のこと。次第に車内が混雑をしてきた時、一人のお年よりが荷物を持って乗り込んできた。私が気づく前に女子高校生の1人が「おじいさん、どうぞ」と、立って席を譲った。その方も「いやー、有難うございます」と、会釈して気持ちよさそうに座り、周りの乗客も朝の混雑の中で明るい気分になった。このような清々しい子どももいるが投書欄に載るような珍しさである。(データ／乗り物でお年寄りに席を譲ること・・・全然していない、しないことが多い・・・1984年64.7% 1995年67.3%「子どもの自然・生活体験等に関する調査研究」青少年教育活動研究会)

最近、よく見かけるのは次のような行動である。・混んでいる電車の中で、大きく足を広げ2人分の座席を占めて座る。・大声でしゃべり、携帯電話の着信音で通話する。・イヤホンで音楽を聴いているが、音がもれている。・臍をだして、化粧をし、パンとジュースで食事をする。・通路やホームに尻をつけて足を投げ出し、しゃがみこんでいる。・万引きなどは、常態化している。(データ／スーパーやコンビニで万引きをすることは、本人の自由・・・日本12.4% 米国2

6.9% 韓国6.5% (「平成15年、高校生生活・意識調査」日本青少年研究所)

今、社会は、必要なエチケット・礼儀・作法、さらには人として大切な基本的な価値、生き方を次世代にどのように伝えるかが問われている。何が美しく正しいことなのか、生き方の見えない子どもを育ててはならない。私達は、子どもの「こころの育ち」を直視し、家庭で「こころの教育」にかかわる必要がある。

## 2. 全家研運動が進める「こころ育て」

全家研は、教育の原点は家庭にありとの基本的な考えに立ち、子どもの内面的な力・意志力を育てようとしている。特に、学習習慣の基底に在る生活習慣を身につけ、道徳的習慣、道徳的実践力を育て、自己の内面を見つめられる子どもを育てることを目指す。そのことが、<家庭教育五訓>に盛り込まれており、全国の会員さんから「こころ育て」についても深く信頼される所以である。改めて、<家庭教育五訓>を確認したい。

一、親は、まず、くらしを誠実に・・・真面目さこそ子育て・こころ育ての基本。誠実は、こころのありようで、知育に偏ってはならないことを示している。

二、子どもには、たのしい勉強を・・・たのしい「勉強」には、知育の基礎に在るしつけ、生活習慣などの「こころ育て」を含んでいる。

三、勉強は、よい習慣づくり・・・こころ

育てを含む「勉強」は、よい習慣づくりとなる。その大切さを強調している。

四、習慣づくりは、人づくり・・・知育と徳育がしっかりと結合して、人格形成ができる。習慣ができればほぼ「人づくり」ができたといえる。

五、人づくりは、人生づくり・・・そうして、幸せな人生となる。

### 3. 教材ポピーでみる「こころ育て」

○年長版「なかよしポピー」・・・「できるかな？」などの企画で歯磨き、洗顔などの生活習慣の確立、身辺自立を楽しく目指す。「ともだちになりたいな」などの読み物で社会性の育成を図る。「草花であそぼう」「お花見にいこう」など読み物にあわせた自然体験活動など、「こころ育て」に必要な内容が満載。

○年中版「ぐんぐんポピー」・・・「おしょうがつです。こんときなんといいですか」などであいさつ・礼儀作法などをシールを使い、楽しさを感じ取らせる。電車の中のマナー、交通安全など社会生活に必要なルールについても楽しく身に付けさせる。

○「こころの文庫」（小1～中3年）・・・ポピーには、毎月、日本や世界の昔話、民話、童話、児童文学、伝記、歴史物語、古典などの読み物がつく。「こころ育て」に読書の大切さが指摘され、全国の学校で朝読書、家庭での読みきかせが盛んになっているが、その最高の本である。「マッチ売りの少女（4年）」「わたばゴッホになる（中2年）」など豊かな心の世界に触れ、知識と情操を育て、心を豊かにできる。

○「ポピー俳句コンテスト」・・・子供たちが、身近な自然や生活の中で感じた美しさやこころ動かされたものを俳句で現す心・情操の教育である。「こいのぼり すいすいおよげ そらのうみ」（小1・久保田優作くん・平

成16年度小学校低学年部門最優秀賞）すなおにすくすく伸びている様が伺われ、このまま成長して欲しいと願わずにはおれない。

なお、ポピーは、芭蕉のこころを伝える文化遺産、京都の落柿舎と大津の義仲寺を守っている。

### 4. 全家研運動を進める中で

○町の中や教室で・・・ポピーの支部長さんやモニターさんは、地域の方とのふれあいの中で仕事をし、また、子どもに関する様々な教育活動をする町の教育者である。ポピー教室でも子どもと接する中で、学力はもとよりしつけ、こころの教育にも力を入れている。地域の子どもは社会の宝、地域で育てようとする「おじさん、おばさん」である。今、この少しおせっかいな社会の人が必要な時代である。（データ/近所の子どもが悪いことをしているのを見たとき叱ったり注意したりする・・・62.7% 近所付き合いもあるので我慢する12.7% 関わりたくないのも何もしない10.1%（平成11年都民生活に関する世論調査）

### 5. おわりに

私達は今こそ全家研運動の持つ意義と大きな力を確認し、それぞれの場で、子どもの「こころ育て」に力を注ぎたい。特に、基本的な生活習慣、しつけ、善悪のけじめなど人間として欠かせない価値を家庭教育を通して、子供たちにしっかり身につけさせたい。人間の生き方・生の美学にまで深めて、大切なことを語りかけたいと思う。



## 家庭教育の大切さは会話と愛情の一言

清永 康子 全家研 ポピー学習支部 支部長

### はじめに

十年一昔といわれていましたが、世の中の移り変わりは、5年サイクルに考えてもよい時代になってきたようです。私が以前の会社勤めをやめ、自宅で支部を始めたのは末息子が高校3年生の1990年ごろでした。学校から帰ってきた息子が「僕が学校から帰ったら、これからは、ずうっとお母さんは家にいるね。」と、うれしそうに言った笑顔は今でも忘れられません。勤めは10年間ぐらいでしたが、その間、息子が寂しい思いをしていたことをその時はじめて知り、子供にとって母親の存在の大きさをしみじみ感じさせられました。

支部を設立し数年たち、モニター（会員作り・配本・集金の手伝い）のお誘いもでき、知人・友人などに声をかけ順調に会員も増えていきました。モニター会や、教育セミナー（ポピーのシステムの1つとして対話活動があります。）を開催すれば多くの母親が参加しました。対話主事先生の話に熱心に耳を傾け、子供の教育を親子で取り組む姿が見られました。

配本にモニターや会員のお宅へ何うと、近所隣に子供たちがいて、昼間の公園は、小さい子供を遊ばせながら井戸端話をする母親の笑い声、下校時間から暗くなるまで、子供たちの遊ぶ声が聞こえていました。モニターや

会員の母親にあって、子供の話・世間話など十分に時間がとれました。お昼のお弁当もお宅に上がり、お茶をご馳走になりながらいただくこともよくありました。訪問先で子供たちが学校から帰ってくると、「ただいま。」「お帰りなさい。」の明るい声、手作りのおやつを食べて公園へ遊びに行く姿を思い出します。これは何年前のことなのでしょう。現在の様子はどうなったのでしょうか？ 私のこれまで活動体験を通して、今の母親について述べさせていたいただきたいと思います。

### ポピーの配本で感じること

現在、配本先の日中70%は留守（母親外勤・外出）、30%は母親または祖父母在宅、夕方6時以降、夜8時半まで回って90%在宅、不在10%ぐらいです。配本時に通る公園も、以前とは違い子供を見かけることが少なくなっています。2・3歳から幼稚園・保育園へと通い、延長保育で帰宅時間の遅い子供が多くなりました。母親が子供の入園と同時にパート勤めを始める家庭が増加しています。又、専業主婦の家庭でも、日中不在のお宅が年々増加しています。家庭にいても針を持つこともないし、本も読まないのことがない。掃除、洗濯が終わった11時ごろから、食事に出かけおしゃべりを楽しんだり、公共施設でのサークル活動・カルチャーセンターに参加したり、子供の帰ってくる時間に



合わせて夕食の買い物すませ、帰宅します。若い母親に聞きました。「どうして小さい子どものいるお母さんも家にいないの?」、「子育てサークル(幼稚園・福祉センターなどでの就園前の幼児を対象に先生を囲んで親子の保育教室)や、用事で出かけています。」子育てサークルに何か所も掛け持ちで回っている親子もいます。家の近くの公園で子供と遊ぶことは少ないようです。同じように、近所の母親同士の付き合いも少なくなりました。

### 子供の習い事

今、幼稚園内で降園時間後、数多くの教室が開かれています。母親はできる限りの教室に通わせています。それでも帰りの園バスが着くと、次の教室へと今度は母親が車で送り出します。小学生も同じです。学校から帰ってくると、待っていた母親の車に乗って、一週間に、いくつもの習い事に通うのです。低学年でも一週間に4つか5つの習い事と塾へ通う子供は珍しくありません。「友達が通うから。」と、負けずに通わせる母親。子供たちは、喜んで通っているのでしょうか? その教室は、子供たちにとって必要なものでしょうか? 子供の好きなことは何でしょうか? 子供に本当に大切なものは何か考えてほしいものです。

### 忙しい親子とポピー教室

5、6年前から、母親に、「子供がポピーをしなくなった。」「私が教えると、子供とけんかになります。」「家で勉強する時間がありません。」と言う声をよく聞かされます。

子供は、認めてくれる人、ほめてくれる人がいなくなると、一日一枚できていた家庭学習も、一週間に2回から、一週間に1回とな

ります。原因は、夕方忙しい親子ではないでしょうか? 夕方帰宅した母親は食事の用意、子供の送り迎え、子供は習い事と走り回ります。親子で、ゆっくり勉強する時間のゆとりがありません。子供にとって、がんばった勉強も、ほめてくれる人がいなければ、してもしなくても同じです。

このような状況の中で“ポピー教室”を開設しました。教室は、家庭学習のお手伝いをする場所で、塾ではありません。母親に替わってポピーに丸付けをします。基本的に教室は一か月に二回です。(ポピーを、家庭学習として上手に使いこなしていけば、2回で十分です。)勉強が終わって、「よくがんばったね。」と、一声。ポピーには大きな花丸。子供たちは大喜び。「はい、ご褒美のあめ玉よ。」その場でほめてあげます。時間が余れば、クイズや本読み、子供たちは満足して帰ります。教室は、月2回の子供とのふれあいの場です。

### 対話活動・教育相談

対話活動では対話主先生を囲み少人数の会を開くことがあります。母親に初めてお誘いする時に、「なぜ、セミナーに参加しないといけないの?」と、よく言われます。(セミナー=勉強は嫌いと思う母親の増加)参加者は減少傾向です。

先日、来年1年生の子を持つ母親を対象に【学習面・生活面】の心構えについてのセミナーを開きました。・・・内容は、箸と鉛筆の持ち方は同じで集中力につながる。生活面では、一に復習、二に会話、三時のおやつは母親の愛。家庭教育の大切さは会話と愛情の一言だ。ナドナド・・・参加した母親は、対話の中で改めて知る一般常識も理解できにく

いことが多いのです。「うちの子供たちはなぜよその人に挨拶ができないのですか？ どうしたら言えるようになるのですか？」こんな簡単なことがなぜ？ と思う、20代の若い母親がいます。「朝、家庭で挨拶をしますか？ まずお母さんが子供に、起きてきたときは“おはよう”と、声をかけましょう。子供から言えるようになるまで続けましょうね。母のお手本の大切さですよ。」と答えました。

朝夕の挨拶が、家庭でも交わされていないようです。近所隣の人々への挨拶ができないのは当たり前です。近所の子から大きな声で、「おはようございます。」と挨拶されると、心の中は、一日中明るい気分です。セミナーでは、教育についてより、こんな話のほうが、今の母親の心に残るようです。また、一度参加すると次からは気軽に参加してくれます。正しい母親教育が必要だと思い、根気強く子育てセミナーの輪を広げていくことの大切さを感じます。

教育相談では、年々いじめ・不登校・いじめによる越境入学・家庭内暴力などなど家庭内では解決出来ない諸問題が増えてきたようです。今は核家族で、相談できる年長者に出会う機会はなかなかありません。壁にぶち当たったとき、信頼できる教育対話主事先生の適切なアドバイスで心の安らぎを覚えます。教育相談を気軽に利用してくださいと多くの会員さんに声をかけています。

### 今、思うこと

新聞を賑わす、幼児虐待・青少年犯罪は増える一方、学力低下も大きな問題となっています。母親に、「一番大事な国語や算数の勉強は？」と聞けば、「それは学校で習っているから。」「塾に通わせているので、私は子供

の勉強はよくわかりません。」と、平気で答える人がいます。母親はお稽古、塾通いに熱中する中、子供の教育はひとまかせの時代となりつつあります。学力低下をたどる一方の日本の教育はこういう母親の考え違いも、大きく関係があるように思われます。世の中の逆流に矛盾を感じてなりません。

小学生までは母親の愛情の教えと育みが大切です。子供の声が聞こえ、そして母親の声が聞こえるところにいてあげてほしいと思います。家庭での勉強の大切さは、親子のコミュニケーションを図る上でも大切です。家族の愛情をたくさん受けて育った子供は人を愛することができます。「今日学校でとてもうれしいことがあったよ。みんなの前で先生にほめられた、早くおかあさんに言いたいなあ！」「今日は学校ですごく嫌な事があった。机に落書きされ、靴がなくなっていた。僕は我慢して帰って来たよ。」・・・お母さんは、こんな子供の気持ちをご存知ですか？ 現代の情勢、間違った教育、母親が変われば子供も変わります。人任せの家庭教育から自分の手による家庭教育をしてほしいと願います。大リーガーのイチローもプロレスの坂口京子も、親子で頑張りました。ペンを持ったことにより改めて確認することができた親の愛、特に母親の愛情の必要性を一人ひとりの母親に語り伝えていきたい。教育産業に携わっていてよかったですと思います。私たち自身も、もっともっと勉強し、自信を持って語り続けたいのです。



## 今、子ども達に セルフエスティームを

山下 謙治 全家研 富山支部 教育対話主事

はじめにー私、死にたい

12月のある日、小5女子のお母さんが駆け込んで来られました。勉強しないでマンガばかり見ている我が子に、「勉強しなさい」と言ったら、「私、死にたい」と言ったとのこと。山下先生、どうしたらいいんですかという話です。

あの忌まわしい佐世保の事件以来、俄然思春期特性についての質問や講演依頼が増えています。むべなるかなです。今や保護者の皆さんの関心は、不登校から思春期における親子関係にシフトしていると言っても過言ではありません。

こんなとき、教育対話主事として強調しているのが「セルフエスティーム（自尊心）」です。セルフエスティームは「自尊心・自尊感情・自己評価・自己尊重と訳され、自分の価値、能力、適性などの自己評価が肯定的であること」と言われます。

セルフエスティームを育てる要素は、次の3点に絞られます。

- ①自分の独自性に気づき、尊重させる
- ②自分の能力を客観的に評価させ、目標を実現して、自分の能力に自信を持たせる
- ③他者との結び付きや関係を感じさせ、他者からの受け入れ感覚を持たせる

以下、日頃私が県内各地の幼稚園や保育所あるいは小学校や中学校の保護者に、セルフエスティームを子ども達に持たせるために強調していることを3点に絞って記してみます。

### 1. 自然体験

一昨年1月にエジプトへ行ってきました。イラク情勢が不安定さを増している最中、おっかなびっくりでエジプト各地を観光し帰国して、またびっくり。犬1匹・猫3匹を預けたペットホテルの請求額の額面。いつもの倍額だったのです。

しかし、内訳を見て納得でした。一番若い20歳の猫が「ストレス性下痢」になったのです。このハプニングが私に子育てにおける大切なことを悟らせたのです。実は、3匹の猫の生い立ちに「猫育ち」と「猫育て」の違いがあったのです。

100歳の猫は息子が中学生の時に拾ってきたドラ猫、50歳の猫は家内の教え子が拾ってきたドラ猫。ところが、20歳の猫だけはドラ猫の経験、つまり自然体験が全然なかったのです。つまり、年増の猫たちは、自然の中で自分の力で「育ち」、若い猫は、生まれ落ちてこのかた家の中で過保護に「育て」られるという生育歴の差だったのです。須らく、

生きとし生けるものに「土・水・太陽」の3つは欠かすことのできない要素と悟りました。

子育ても然り。所詮「子育て」は育児書に基づく「知識」であり、本命は自然と先輩の「知恵」に基づく「子育て」です。袴を着けて「育ててやろう」と知識で頑張るよりも、「一緒に育とう」と知恵で楽しむのはいかがでしょうか。

## 2. 付かず、離れず

これは、ノーベル化学賞に輝く田中耕一さんのお母さんの子育ての基本です。不思議なことに、田中少年を富山市立八人町小学校で3～6学年と担任された恩師、現上市町教育長・澤柿教誠先生の教育方針にもぴったりです。

澤柿先生が田中少年を担任されたとき、お母さんから相談されたのが実の母でないこと。先生は「私に任せて」と言われましたが、結局3年間言われませんでした。何故か。それは母子関係があまりにも良かったからです。その関係を、先生は「付かず、離れず」という言葉で表現なさいました。

なるほどと私はまた一つ何かを悟ったように思います。現今、母子分離の未熟な親子関係の多い中、なんと素敵な母と子の関係でしょうか。我が子をかまひ過ぎての児童虐待に始まり、育児ノイローゼ、育児放棄などなど新聞紙上を賑わすあまりにも悲しい現実。

ところが、澤柿先生の教育もまた「付かず、離れず」なのです。先生の教育信条は「子どもは小さな科学者だ」。田中さんは「先生は決して間違いだとは言わなかった。自由に発

想していいんだよと言われた」と述懐しておられます。

一人の子どもの類いまれなる大成の裏に、母と恩師の隠れた知恵「付かず、離れず」があったことを噛み締めたいものです。

## 3. パパとママの世界

一昨年(2011年)の11月、久しぶりに富山市へ来られたスインガー・ソングライターこんのひとみさんから富山県民へのメッセージ。我が子に「あなたは日本一でなくていい、学校一でなくていい、クラス一でなくていい、パパとママの世界一だから」。

何ほどの説明がいりでしょうか。何もありません。この世に生を受けた我が子を、あるがままに認め、かつ信じる。教師と子どもの「信頼関係」に対して、親子の関係が「信認関係」と言われる所以です。

この親子の信認関係を醸成する方法としてアドラー心理学は次の3点を強調しています。褒めたり、叱ったり、何か賞を与えてもやる気の起きないときは是非実行してみましょう。

- ①よい人間関係とは、タテの関係をやめて、ヨコの関係に入ることである
- ②勇気づけの「私メッセージ」(ありがとう・うれしい)を実行し、勇気くじきの「貴方メッセージ」(がんばれ・えらい)は避ける
- ③共同体感覚(自己受容・信頼感・貢献感)を大切にする

とかく世の親は、我が子を能力で評価しがちです。どうして貢献で評価できないのでしょうか。お手伝いをしてくれた我が子に対する

対話は「あら、貴方もやれば出来るのね」という能力に注目した評価より、貢献に注目した評価「手伝ってくれてありがとう。ママとっても嬉しいわ」が正解でしょう。

### おわりに一千の風になって

夏のある日、富山市内の中学校で「先輩が語る」講演会にお招きを受けました。暑い一日で、生徒達が体育館で汗だくになりながら聞いていたのが忘れられません。

その講演会のエピローグが「千の風になって」。この詩は9.11米国同時多発テロで、父親を亡くした11歳の少女が、一周忌に朗読しました。また、アイルランド共和国のテロで命を落とした24歳の青年が、「私が死んだときに開封してください」と両親に託した手紙の中に、この詩が入っていました。そして、女優マリリン・モンローの25周年忌に朗読されました。

私が講演会で、この「千の風になって」を生徒達に紹介したのは訳がありました。

今年の5月20日、私の住んでいる町内に1枚の回覧が回りました。それは「麻実ちゃん」の訃報です。一瞬心臓が高鳴りました。実は私の教え子の中にも「麻実ちゃん」が一人います。夕方の散歩でようやく麻実ちゃんが校下の元中学校であることが分かりました。その時、思い出したのが新井満の「千の風になって」でした。

神戸で、長崎で、佐世保で、私達はあまりにも大きくて悲しいことを体験しました。人の命の重みが実感出来ないところに、学校も、家庭も、地域も、教育もありません。今、日本の子ども達に最も大切なことは「いのちの

対話」ではなからうか。そのためにも、セルフエスティーム、つまり、他者からの受け入れ感覚を育てたい。また、育てなければならぬ。

最後に、私は中学生達に言いました。皆さんは、お父様やお母様の愛が見えますか。寝ても覚めても皆さんのことを心配しておられる先生方の愛が見えますか。お外をご覧なさい。あの光の中に、風の中に、水の中に、皆さんの先輩、麻実ちゃんは光っています。どうか、目に見えない大切なものが見える心の目を育てて下さい。

では、最後に「千の風になって」をお聴きしましょう。

私のお墓の前で 泣かないでください  
そこに私はいません  
眠ってなんかいません  
千の風になって 千の風になって  
あの大きな空を 吹きわたっています

秋には光になって 畑にふりそそぐ  
冬はダイヤのように きらめく雪になる  
朝は鳥になって あなたを目覚めさせる  
夜は星になって あなたを見守る

私のお墓の前で 泣かないでください  
そこに私はいません  
死んでなんかいません

千の風に 千の風になって  
あの大きな空を 吹きわたっています

あの大きな空を 吹きわたっています

(作者：不明 訳：新井満)



## 自分の子育てをふり返って

立石 ひとみ 全家研 桑名支部 教育モニター

### はじめに

下の子が生まれて6年間は、専業主婦として「子どもを育てる」ことに一生懸命でした。

上の子が、二年生。下の子が、年長の秋、近所の人から、「ポピー」のおすすめと同時に、モニターのお話があり、月末の二日間ぐらい、近所の十数軒に、本を配るお仕事ということで、小さい子どもがいてもできるからと、引き受けました。それまでは、近所のよく似た年齢の子どものお母さんとかお話をする機会がなかったのが、モニターになり、先輩お母さんのモニターさんから、お話を聞く機会が増え、子育てについて、多くのことを学ばせていただきました。現在、上の子が21歳、下の子が19歳と子育ても終わりに近づいていますが、子どもを育てるといふよりも、自分が育てられたかなと感じています。

### 兄弟について

上の子と下の子は2歳2か月違いです。小さい頃から、私は「兄弟仲良く」と「うそをつかない」を、子育ての信念としていました。二人は、とても仲良く育ってくれました。男と女ですが、今もとても仲良しです。ケンカはなるべくならないように気をつけ、二人を

公平に扱い、とにかく仲良くすることが大切だと言って、上が下を遊んでくれると、「仲良くできたね。」とか、「えらいね、お兄ちゃん」とほめました。しかる時は、子どもがわかるように「〇〇をしたから、お母さんは、悲しかった。」と、とても悲しそうに、時には涙も流しながら自分の気持ちを子どもにみせて話しました。

でも仲が良すぎて困ったこともありました。それは、上が中学に入った頃です。下はそれまで、家に帰ると、いつもお兄ちゃんとその友達や、自分と同年齢の男の子（上の子に遊んでもらうために家に来る子）と遊んでいました。自分でお友達を作ることなく過ごしてきました。私が、用で留守になっても、お留守番ができていました。ところが、部活で帰宅時間が遅くなった上の子と遊ばなく、自分が帰ってからの時間をどう過ごすのかわからなく、私にやたらベタベタとまとわりつくようになり、朝から「今日は家にいるの?」「何時に帰ってくるの?」と聞くようになりました。私は、「エー」「なんでー」と思いながら考えてみました。そして、それまでの3、4年、私は下の子の「もり」を上の子にさせていたことに気づきました。そのため、しばらく私は小学校から帰る時には、家にいて遊ぶ時間を作りました。そのうちに、自分のお

友達をみつけたようで、私からはちょっと離れていきました。

### 両親（夫婦）について

夫は自営業で、自宅で仕事をしています。子どもを育てるのは「両親」が当たり前、といえばそうなのですが、今の世の中、あまり当たり前というのが常識でない場合が多いように思います。結婚をして、うまくいく人、いかない人、それはお互いの常識、当たりの価値観がかけ離れていない人なら、うまくいくのではないのでしょうか。そして、それが子どもにも重要であると感じています。「きびしくする所」「大きな目でみる所」「これは許すこと」「これは許されないこと」「あいさつ」などなど。生活に関するひとつひとつの全てが、子育てに影響をするものです。両親（夫婦）の態度に差があると、子どもがどう歩いていけばよいのか、迷ってしまうと思います。

家庭教育が、家庭共育で「共に育つ」。それは子どもも育つし、親としても育つ、夫婦としても育っていくと考えます。「育ててやっているのに」ではなく「共に育っていく」。でも、先に生まれた私たちは、子どもと同じ所に立っているのではなく、自分たちの経験から「アドバイス」や「知恵」を教える親でなくてはいけないと思っています。

最近、友達感覚の親子というのが増えているようです。仲が良いのかもかもしれませんが、親を尊敬することはないし、親のありがたさはわかっていないように思います。「親しき仲にも礼儀あり」という言葉がありますが、それは家族間においてもそうなのかなと思

ます。悪い時には、親が子にあやまることも必要だし、何かをしてもらったなら、子どもにも「ありがとう」を言うべきです。家の中で自然にそういう言葉が出れば、外へ出た時にも、同じように言葉がでるかなと思います。

### 最後に

平沢興先生の家庭教育五訓の中で、『人づくりは人生づくり』という言葉があります。私は、人づくりは、他人ではなく（子どもでもなく）、自分づくりかなと考えています。自分が人として生きていくのに、「夢」を持ち、人生をつくっていきたいと思います。

今、仕事と趣味に、超多忙の毎日を過ごし、家庭生活、主婦業をだいぶおろそかにしている私が、家庭教育について述べることはないのですが、この機会に少し自分の現状をふり返り、これからの家庭教育というより、家庭生活をまじめに生きていきたいと考えています。